

# 薩南諸島

—21世紀への挑戦—

青山 亨〔編〕

鹿児島大学  
多島圏研究センター

# 薩南諸島

—21世紀への挑戦—

青山 亨〔編〕

鹿児島大学多島圏研究センター

表紙写真

左上より、高速船トッピー、屋久島の漁港、十島村の仮面神ボゼ、奄美大島のサトイモ農家  
右上より、喜界島の宴の夜、徳之島の闘牛、沖永良部島(提供者本文参照)

裏表紙写真

奄美大島に咲くハイビスカスの花(名瀬市役所袖観光課)

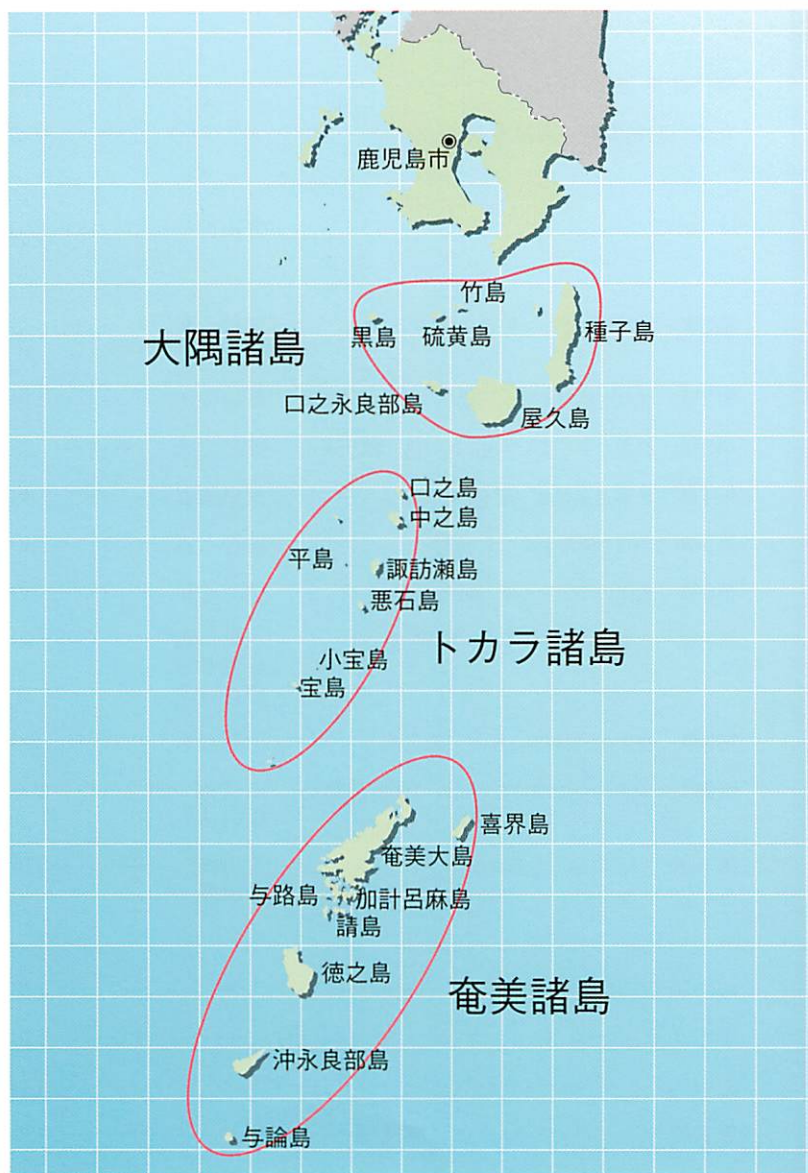
---

# 目 次

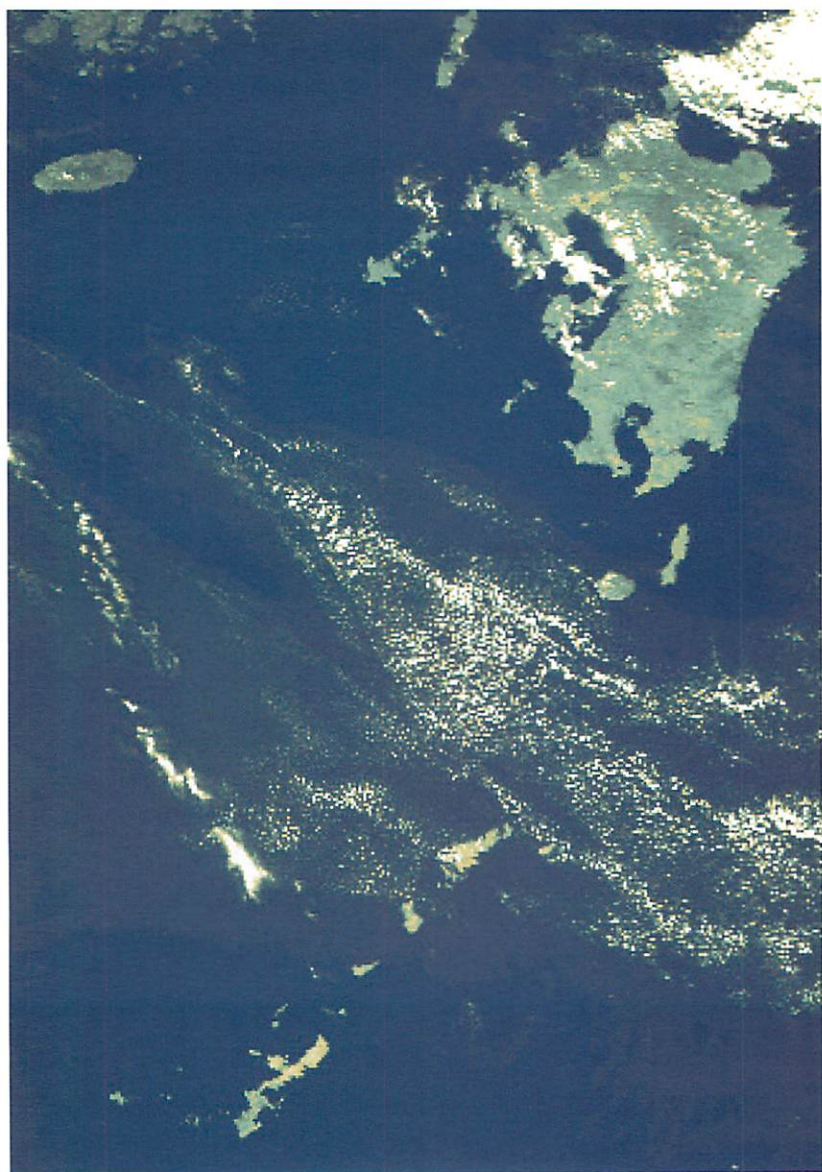
薩南諸島(21の有人島) .....	4
九州・薩南諸島の衛星写真 .....	5
はじめに .....	野田伸一.....6
第1章 薩南諸島 その過去・現在・未来 .....	植村 哲 .....8 青山 亨
第2章 元気を発信する 三島村 .....	新田栄治 ..... 18
第3章 日本でいちばん宇宙に近い島 種子島 .....	野呂忠秀 ..... 28
第4章 世界遺産の島 屋久島 .....	田島康弘 ..... 38
第5章 明日を模索する 十島村 .....	河合 溪 ..... 50
第6章 東洋のガラバゴス 奄美大島 .....	桑原季雄 ..... 62
第7章 農業に未来を託す島 喜界島 .....	石黒悦爾 ..... 76 桑原季雄 植村義彦
第8章 長生きして闘牛に熱中 徳之島 .....	中野和敬 ..... 90
第9章 エラプユリに賭けた人びと 沖永良部島 .....	田代啓一朗 ..... 104 坂田祐介
第10章 与論島 与論健康村 .....	古川誠二 ..... 116 野田伸一
薩南諸島の有人島のデータ .....	128
参考文献・ホームページ .....	130
索引 .....	133
著者紹介 .....	137



# 薩南諸島 (21の有人島)



0 20 40 60 80 100km



九州・薩南諸島の衛星写真  
NOAA/AVHRR 画像 ©鹿児島大学農学部、柏木純孝

## はじめに

鹿児島大学多島圏研究センターでは、「多島域における小島嶼の自律性」をテーマとしたプロジェクト型の共同研究を実施している。その一環として、薩南諸島に住む人々の暮らしを国内や海外に紹介する本の出版を企画した。鹿児島の離島に住む人々が抱える諸問題、そして、それらの問題を乗り越えるための島おこしの事例を記録し、離島の将来を考えるのがかりにしようとするものである。

我国では高度経済成長期に地方から大工業地帯への若年労働力の移動があり、その結果、地方は過疎と後進性からの脱却という命題を抱えることになった。一方、高度経済成長の恩恵を最も受けるはずであった都市部においても、都市の脆弱性は克服できなかった。住宅事情や通勤事情の悪さは都市生活をゆとりのないものにし、無秩序な開発、公害の発生、ごみの増加、産業廃棄物による汚染などは深刻な環境問題をもたらした。

高度経済成長期を契機として都市化は全国に及び、伝統的な共同体は急速に崩壊し、全国に画一的な地域社会を生み出すことになった。しかし、変容した地域社

会で次々に生ずる問題は、切り離されていた自然の価値や伝統的な地域社会の重要性を意識させることになった。このような住民の地域に対する意識の高まりが、住民自身による地域社会形成の動きを生み出している。

鹿児島県の特徴として鹿児島市とそれ以外の自治体の規模の違い、それと離島の存在があげられる。鹿児島県では鹿児島市への人口集中に伴い、郡部の過疎化と高齢化が進み、大きな不均衡が生じてしまった。この状況は離島ではさらに著しいものとなっている。鹿児島県の多くの離島は自治体の合併によっても効率化は期待できないであろう。しかし、環海性、隔絶性、狭小性などの制約の中で、離島では優れた自然環境の中で貴重な歴史文化を育てており、地域の多様性が保全されている。また、離島の地域社会では伝統的な共同体が地域活性化の原動力となり、自らの英知と自助努力により多種多様な地域おこしの取り組みが行われている。

この本で紹介する地域おこしに取り組む人々の活気あふれる様子が、固有の歴史文化や自然の価値を見直し、21世紀の地域の

あり方を考える機会になることを期待したい。

終りに、本書の刊行にあたり、様々なご協力をいただいた鹿児島県市町村の関係者の皆様、地元住民の方々に厚くお礼申し上げます。また、本プロジェクト実施に対して教育改善推進費による援助をしていただいた鹿児島大学の田中弘允学長に感謝申しあげる。

野田伸一

(鹿児島大学多島圏研究センター長)









# 第1章

# 薩南諸島

その過去・現在・未来

植村 哲  
(鹿児島県離島振興課)

青山 亨  
(鹿児島大学多島圏研究センター)

この本の題名は薩南諸島と名付けられている。まず、薩南諸島の範囲を明らかにしておこう。九州の南端である大隈半島から台湾にかけて、南西の方向に連なる島々を南西諸島と名づけている。これは西側の東シナ海と東側の太平洋の境にもなっている。そのうち沖縄県に属する南半分を琉球諸島、鹿児島県に属する北半分を薩南諸島と呼んでいる。薩南諸島とは文字どおり薩摩の南にある島々という意味である。

薩摩という名前は、8世紀前後に地名として記録に登場する。九州の南端の西側、現在の鹿児島県の西半分にあたる。12世紀末に島津氏が大隅、日向とあわせて薩摩を支配するようになって、ほぼ現在の鹿児島県に相当する薩摩藩ができた。九州の南端という地理的な条件のおかげで、薩摩は古来から海外との玄関口として様々な文物が出入りしてきた。日本では、中南米原産のサツマイモに薩摩の名が付いているし、海外では、朝鮮半島から連れて来られた陶工たちが作り上げた薩摩焼きが有名である。

日本では聞き慣れないが、サツマという名前は温州ミカンの英語

名 Satsuma として海外では知られている。確かに、種が少なく甘味が強く、しかも皮が柔らかく手でむける温州ミカンは他の柑橘類にはない長所を持っている。鹿児島県の長島が原産地だったが、19世紀後半にアメリカへ苗木が輸出されたとき、薩摩からもたらされた柑橘類だということでサツマと呼ばれたのである。

日本は北海道、本州、四国、九州という大型の島に加えて5,000近くの島々から成り立っている。そのうち240の島が鹿児島県にある。この数は日本の都道府県としては五番目で、鹿児島県は全国でも有数の島嶼県ということが出来る。鹿児島県の島々には、天草諸島の一部、甕島列島、薩南諸島などがあるが、なかでも薩南諸島は、琉球諸島とともに沖縄を経て台湾へとつながる一続きの島々の一部をなしており、古くから太平洋あるいはアジア大陸と日本を結ぶ「海上の道」としての役割を果たしてきた。たしかに、薩南諸島は海によって本土とも近隣の島々とも隔てられている上に、関東や関西といった日本の政治や経済の中心地からみれば周辺に位置するが、その裏返しとして、海を通じて直接、外

の世界へとつながっていたわけである。

薩南諸島は通例、大隅諸島、トカラ（吐噶喇）列島、奄美諸島の三つの群島に分けられる。その中に全部で21の有人島があるが、本書では、このうち七つの代表的な島と小さな島々の集まりからなる

二つの村を取りあげて紹介していきたい。具体的には、大隅諸島に属する、黒島などからなる三島村、種子島、屋久島、次に、トカラ列島に属する、中之島を中心とする十島村、そして、奄美諸島に属する奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島である。

## 特色

薩南諸島は、北緯27度から30度の間に位置している。このため、7月から9月にかけては、南から訪れる台風による被害をしばしば受ける。しかし、このように、南に位置していることと、台湾から東シナ海を北上してきた暖かい黒潮が奄美諸島と大隅諸島の間を抜けて太平洋へと流れていることのおかげで、この地域は、亜熱帯性の温暖な気候にも恵まれてきた。薩南諸島を南へ下がって行くほど亜熱帯的な動植物がたくさん見られる。島々を取り巻くサンゴ礁や海岸に密生するマングローブは観光案内でも馴染みの深い風景であるし、サトウキビは代表的な栽培作物の一つとなって

いる。屋久島と奄美大島の間を境として土着の動植物の種類が大きく変わることが分かっており、発見者の名前をとって渡瀬線と呼ばれている。

薩南諸島の社会も独自の文化を育んできた。高倉という高床式の独特の建築の存在は、薩南諸島の文化と南方の文化との強い関係をうかがわせる。なかでも、奄美諸島の文化は琉球諸島の文化と強いつながりを持っている。事実、トカラ列島以北の方言が日本の本土の方言に近いのに対して、奄美方言は、沖縄方言などともに琉球語に属する。このように、文化的には琉球諸島と近かった奄美諸島が、薩南諸島の一部として琉球諸島から分けられるようになったのは、この後で述べるように、歴史的な変遷があったからである。

---

## 歴史

---

海は、島々を隔てている一方で、外の世界と結びつける通路ともなる。薩南諸島はその地理的な位置のおかげで、先史時代から、隣接する琉球諸島と、さらには海外との深い結びつきをもってきた。ここで、歴史時代にはいつてからの薩南諸島の歩みを振り返ってみよう。

薩南諸島が日本の西の文明国である中国との交通に使われたことは言うまでもない。7世紀から9世紀にかけて、日本は、先進国であった中国の唐の文化を学ぶために、唐の宮廷に遣唐使と呼ばれる公式の使節を十数回も送っていた。この遣唐使が中国へ渡るときに通った航路は時代によって変わるが、そのうちの 하나가南島路と呼ばれるものである。これは、薩南諸島の島々に沿って南下していき、揚子江の河口を目指すものであった。日本の仏教制度の確立に大きな貢献をした中国僧鑑真は、日本に渡ろうと辛苦の末、753年に九州の南岸に上陸したが、その彼が通った航路も南島路であった。

日本とヨーロッパとの結びつきにも薩南諸島は大事な役目を果たした。16世紀中頃になって2名のポルトガル人を乗せた中国船が種子島に到来した。日本人とヨーロッパ人との最初の出会である。日本側の史料によると1543年のこととされている。この時、ポルトガル人が伝えた火縄銃は日本の鍛冶師によって模造され、「種子島」の名で日本中に広まり、当時の戦術を大きく変えた。この後、イエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエルが日本にやっきて、キリスト教の布教に努めたが、日本を去って中国へ向かう途中で、種子島に立ち寄っている。

ところで、15世紀になると薩南諸島の南では大きな変化が起こっていた。それは、琉球王国の統一である。それまで琉球諸島には三つの小王国が並び立って互いに争っていたが、その中の中山王国の尚氏が他の2国を併合して琉球王国をうち立てた。琉球王国はさらに勢力を北に伸ばし、奄美諸島もその勢力圏に収めた。奄美諸島に琉球王国の文化が強い影響を及ぼしているのはこのためである。琉球王国は日本や東南アジアから集めた物産を中国の明

国と交易することで大いに繁栄した。薩摩藩もまた初めは琉球王国と対等な関係で交易をおこなったのである。しかし、この友好的な関係は長くは続かなかった。明国との交易で得られる利益を手中におさめるため、1609年、江戸の徳川幕府の同意を得たうえで、薩摩藩は琉球王国を侵略した。さらに、侵攻作戦の途中で、奄美諸島の島々をも征服し、薩摩藩の直轄領とした。与論島以北の島が薩南諸島として琉球諸島から分けられるようになったのは、この時からのことである。

薩南諸島が島津藩の領土になったことに関連して、島の住民の生活を大きく変えるものが17世紀に到来した。それはサトウキビである。1610年に、福建省に漂着した奄美大島の住民が密かに苗木を持ち帰ったのが、奄美大島におけるサトウキビ栽培の始まりとされている。19世紀になると、サトウキビがもたらす利益に目を付けた島津藩は、奄美大島、喜界島、徳之島の島民に対してサトウキビの栽培を強制し始めた。サトウキビの強制栽培は島民にとっては過酷な生活を強いることになったが、薩摩藩にとっては有力な財源とな

り、やがて薩摩藩が江戸幕府を打倒する勢力の一員として活躍する要因となった。

明治維新後、薩南諸島は鹿児島県、琉球諸島は沖縄県に属することになったが、やがて、これらの島々は再び歴史の荒波にもまれることになった。第二次世界大戦の末期、アメリカ軍は沖縄諸島に上陸し、日本軍との間で激しい戦闘が繰り広げられた。そして、戦後、北緯30度以南、つまりカラ列島以南の島々はアメリカの軍政下に入った。この状態は、1952年にトカラ列島が、1953年に奄美諸島が、そして琉球諸島が1972年に日本に返還されるまで続いた。薩南諸島が日本に返還されて、1960年代になると日本では高度経済成長の時代を迎えたが、その中心となったのは東京や大阪を中心とする大都市圏であった。薩南諸島の島々では、より豊かな収入をもたらす職を求めて多くの若者が島から出ていったために、過疎化の問題を抱えるようになった。戦後の薩南諸島の歴史は、島の新たな活性化の方策を模索する歴史だったと言ってよいであろう。

(青山 亨)



---

## 課題

---

台風などの自然条件の厳しさや過疎・高齢化などの社会条件の厳しさをどのように克服するか、これが薩南諸島に住む人達や離島市町村の戦後における最も重要な課題であり、様々な努力が積み重ねられてきた。こうした努力の一つの下支えとなったものが、1953年に制定された離島振興法と1954年に制定された奄美群島振興開発特別措置法である。これらの法制度は、薩南諸島を含む鹿児島県の離島の状態を「本土並みの水準」に引き上げるため、道路・港湾・空港などの交通面や農地・漁港などの産業面、生活環境の向上や教育・福祉の充実に重点的な投資を保障するものであり、今日までの約半世紀の間に果たしてきた役割は極めて大きい。

また、多くの離島を抱える鹿児島県としても、「離島の中の離島」ともいえる特に自然的・社会的条件の厳しい一部の島々を対象に、国の補助の対象にならない小規模な公共事業やきめ細やかなソフト的な施策に県独自の予算で補

助を行ってきている。

これらの結果、まだまだ必要なことは多いものの、薩南諸島の人々の生活は格段に良くなった。大型の旅客船や高速の飛行機が運航できる港湾・空港、一日がかりだった島の中心地への道のりを短時間で結ぶ道路網、温暖な気候を活用した農作物を育む農地、住民の生活や健康の不安を和らげる診療所や福祉施設。島は必ずしも「はるか海の彼方」ではなくなってきた。

しかし、島々の苦悩はいまだに続いている。厳しい自然の前にはまだまだ未整備な交通網。過疎化・高齢化が非常に早いスピードで進行し、地域の活力が失われていく不安。自由競争や規制緩和の流れの中で、海に隔てられているがゆえの産業振興の難しさ。「完結した空間」であるがためにより微妙な開発と自然とのバランス…。社会の急激な変化の前に、薩南諸島の課題はいまだに解決されていないのである。

最近では、離島が積み重ねている様々な努力に対して、人がいなくなっている離島への投資はもう意味がない、無駄遣いなのではないかという議論も都会の側から出

てきている。しかし、一方で、人と自然の共生を考えることが必要不可欠になってきている今、多くの自然や固有の文化が残る離島の奥

深さに心惹かれる都会の人々が着実に増えてきているのも事実である。

## 島の役割

日本の離島振興法制が半世紀の節目を迎えようとする今日、薩南諸島には難問が山積しているが、これらの島々に果たして「未来」はあるのだろうか。

薩南諸島を含む鹿児島島の離島は、本土から遠く離れた外海に位置するものが多く、どんなに技術革新が進んでも、全ての島々が本土と橋やトンネルで結ばれるようなことはないだろう。そんなときに、国の離島振興の制度が廃止されれば、「もう離島には手間をかける必要はない」ということになる。

しかし、鹿児島島の島々はその程度の重みしかないのか。これだけ豊かな資源に恵まれた島々が存在していること自体が、鹿児島にとって、日本にとって、あるいは世界にとっての大きな財産であるはずだ。離島が国土にとって果たす

べき役割が何なのかもう一度考えてみると、まず、治安・漁業水域・環境の保全など、国土や領海を守り管理する役割が挙げられる。この役割は、島々に人が定住していることにより初めて十分に果たされるものであり、そのためには人々の最低限の生活を確保することが大事なこととなる。また、画一的な社会の中で悩み続けている日本人にとって、島々が多様な自然や文化を保全する役割を担っていることは、今後もっと注目されてよい。離島は、日本人に安らぎを与え、多くの示唆を与えてくれる場所なのである。薩南諸島を含む鹿児島島の島々は、実はこれらの役割を担う条件を十分に満たしているところばかりであろう。

このように島々の価値を見出してみると、逆に「本土並みの水準」とは何なのかと考えさせられる。社会基盤の整備は、まだまだ足りないところもあるがある程度充実してきているし、所得が本土並み

---

でなくとも豊かな生活ができる場合もあるから、全てにおいて「本土並み」である必要はないのかもしれない。一方、島への定住対策や輸送コスト対策、廃棄物処理基準への対応の問題など、離島特有の

課題に対する国の措置はまだまだ不十分であり、こうした分野には「本土並みの水準」、あるいは「本土以上の水準」が必要なのではないだろうか。

## これからの戦略

---

過疎化が相当進んでいるとはいえ、まだ全体で20万人程度の人口を有している鹿児島島の島々。その「体力」を用いて活力を取り戻すには、もちろん国全体で離島のことを再評価してもらい、必要な格差是正を図らなければならないが、島々の側からの積極的な戦略、つまり、自分達の個性をどのように島の内外にアピールするかが重要になってくる。

ここで注目すべきことは、島の内と外との連携、すなわち島の住民と都市の人々との親密な交流である。薩南諸島を含む鹿児島島の島々からの出身者（特に奄美群島の出身者）は、大都市を中心に同郷者の組織である「郷友会」を結成し、強いきずなを保っているが、

このような強いネットワークを持っている地域の例は日本では数少ない。今後、こうした都市部での人脈を島々の活性化に結び付ける工夫が必要であるが、さらに、地縁・血縁のみならず、島の応援団でありIターンの子備軍ともいえる島々への関心の高い人々も取り込んだ「準島民」のネットワークを拡張、島民がこれらの外の人々との交流をある程度柔軟に受け入れることが、新たな発想の島おこしの鍵となる。

島々の内と外とを結ぼうとする新たな戦略は、実はすでに始まっている。鹿児島県も、これまで屋久島において環境文化村構想を推進し、2000年（平成12年）には自治体レベルで初の試みとして世界自然遺産会議を開催している。さらに、2001年（平成13年）度からの県総合計画においては、新たな時代潮流も踏まえ、奄美群島の

世界自然遺産への登録を目指した取組みなどを柱とする「奄美群島自然共生プラン」や、都市とのより密接な交流・連携を深める中で島々を再評価しようという「ふれあいアイランドの創造」などの構想

が提案されている。

離島振興法制の半世紀の節目にあたる今日、国においてもこれらの「挑戦」を支援する新たな政策の在り方が検討されるべきではないだろうか。

## 島人の誇り

島は海に囲まれた限られた空間である。その空間は、実は「持続的発展が可能な社会」の最も典型的なモデルである。この社会を育てていくには、島を愛する気持しまびとち、島人の「誇り」が必要不可欠である。日本に貢献する島々、本土に引け目を感じない島々、サポーターを広く島外に持つ島々、すべてこれらは「素晴らしい自分達の島をもっとよくしよう、何とか頑張っていこう」という島人の気概から生まれる。21世紀の離島振興は、行政によって準備されたものではなく、島人たちが、自らの創造性と連帯によって、試行錯誤を繰り返しながらも誇り高く進めていくものであろう。

温暖な気候と台風の猛威、島

ごとに異なる豊かな自然と往來を隔てる海、個性を強烈に発揮する文化と都会への憧れ、海の道を通じた人々の遭遇が織りなす歴史と愛憎相まった島への想い……。種子島、屋久島、奄美群島、三島・十島、あるいは本書の対象には入っていない甌島など、薩南諸島を含む鹿児島島の島々には、ある時は悩み、ある時は喜びを感じながら、日々前を向いて暮らしている島人たちがいる。彼らの心には新たな世紀の島人の「誇り」が育っていくのか。以下の章では、薩南諸島の島々をそれぞれ異なった切り口で捉えながら、「誇り」という名の島々の宝を探してみたい。

(植村 哲)







## 第2章

元気を発信する

# 三島村

新田 栄治  
(鹿児島大学法文学部)

人口 446 人の村が今、世界に向けて「元気」を発信している。その名は「三島村」。

三島村は硫黄島、竹島、黒島およびその近辺の新硫黄島などの無人島や岩礁からなる村である。長崎鼻から南南西へ 40km の硫黄島と竹島、枕崎から 50km の黒島があり、東シナ海上に点在している。南西諸島の最北端にある。年平均気温は 19.4 度と温暖で、降雨量はもっとも多い黒島で 3,100mm と、かなりの雨が降る。

竹島は周囲 9.7km、面積 4.18km<sup>2</sup>、人口 94 人(1999 年 3 月 31 日現在。以下同じ)、硫黄島は周囲 14.5km、面積 11.79km<sup>2</sup>、人口 140 人、一番大きな黒島は周囲 15.2km、面積 15.65km<sup>2</sup>、人口 212 人である。総人口 446 人という有数の過疎の村である。海と山の豊かな自然に恵まれた島であるが、毎年台風に襲われる過酷な自然とも向き合っている。硫黄島は活発な活火山の島でもある。

三島村へのほとんど唯一の交通手段は毎月 11 往復を運行している村営の 800t の船「みしま」である。他には不定期の小形飛行機便があるのみである。

三島村が直面しているのは過

疎と高齢化という、全国共通の難題である。60 ～ 70 歳代人口が最大であり、逆に 15 ～ 25 歳代人口は極めて少ない。村に高校がなく、中学校を卒業すると進学のために本土に移住せざるをえないこと、若年世代にとり村内での職が乏しいことなどが原因である。そのため若者は島を出ると帰ってこない。就業人口で最大なものは建設業であり、過疎地の通例の公共事業が社会的に大きな意味を持つ。

だが、交通の不便さ、過疎と高齢化というハンデを乗り越えて、「GENKI UP MISHIMA」というスローガンを掲げて、三島村は 21 世紀に向けて大きく飛躍しようとしている。それは畜産、観光、教育、それに村から国際社会への『三島村の元気さ』の発信によってである。

## 産業

三島村の産業には畜産業、農林業、水産業、鉱業がある。タケノコや椿の実を産する農林業、イセエビ漁の水産業、珪石採取の鉱業があるが、農林業 800 万円、水産業 1,500 万円といずれもたいした金額をあげてはいない(1999 年度)。

今最も期待が高いのは「三島牛」の畜産業である。「三島牛」は鹿児島県のブランド肉用牛である薩摩黒毛和牛のひとつで、近年味の良さから高く評価されているものである。どの島も草地が広がる三島村では、この黒毛和牛の種付けから子牛に育てるまでを行い、子牛を村外の市場へ出荷する。村内では 550 頭ほどの牛が飼われている。三島すべてに牧場があるが、特に黒島では全戸数 112 戸のうち 32 戸が三島牛の飼養農家であり、約 320 頭の牛がいる。2000 年には 287 頭が出荷され、8,073 万円の売上高であった。近年では 1 億円を超える年間売上高を記録するまでになっている。三島牛の基幹産業化は三島村が重点的に行っており、草地の改良、環境整備、飼養

農家への補助金などの支援策が功を奏して、今では「三島牛」として市場でもブランドが確立してきた。村の過疎対策として行われている村外からの定住促進助成制度においても、畜産への就業が重点的に行われ、定住者には子牛 1 頭を贈り、県有牛や村有牛の貸付、牧場・草地・畜舎等への貸付が行われている。この制度により、岡山県から移住してきた一家もあり、三島村の自然の中で牛とともにおおらかな生活を楽しんでいる。

鹿児島県が薩摩黒毛和牛と薩摩黒豚を県の特産品として全国に宣伝し、消費者の評判も高くなってきた。薩摩黒毛和牛が市場に出回るには、良質の子牛の育成が基盤になければならない。三島村の「三島牛」は三島村だけでなく、鹿児島県全体の畜産業にとってもこれからずっと重要になってくるだろう。2001 年秋には新型フェリーが就航する予定であり、牛の出荷にも大きな利便となることだろう。過密状態の畜舎のなかで薬漬けで育てられたのではなく、豊かな自然のなかで放牧されて育った健康で優秀な子牛の生産が、三島村の特徴として、今後もさらに評価されることが期待できる。

## 三島カップ・ヨットレース

三島村は言うまでもなく、海に囲まれている。四方を囲む海は三島村と外の世界を隔てるものではなく、外の世界と360度の全方位に開けた道である。この海道をヨットが走る。1990年8月に始まったヨットレース、「三島カップ・ヨットレース」は以後毎年8月第一土曜日に、

薩摩半島南端の山川港を出発し、600マイル南の竹島港をゴールとして行われてきた。このレースには県外からの参加者も多数あり、毎年40艇以上のヨットが参加している。このレースは当初村おこしイベントとして始まったが、単発的なイベントで終わらせず、海や島を愛する人々のために、故郷を愛する人々のために継続しようという思いが集まった人々の間に浸透し、今年までに連続11回という定着した催しとなり、単なる村おこしイベント



三島カップ・ヨットレース ©三島村役場

のレベルを超えた、国際的ヨットレースとして成長している。三島カップ・ヨットレースを始めたきっかけは、三島村に外の世界から多くの人々に来てほしいという気持ちが始まりだが、500人を越える参加者の宿泊や食事の手配など、小さな島が主催するにはたくさん問題が発生した。これらの難問を解決するために、トップダウンではなく、村役場の行政と三つの島の島民とが話し合いを重ねることによってひとつひとつ解決してきた。村の人々の結びつきがさらによくなっていくという効果も生まれた。

三島カップは勝負を競うレースだけでなく、その後の懇親パーティーが参加者の大きな楽しみになっており、レースもだがパーティーも、という人が増えている。村

## 世界につながる 三島村

ヨットレースに加えて、アフリカのギニアからジャンベがやって来た。ギニアの伝統楽器である太鼓、ジャンベの演奏者ママディ・ケイ

民総参加の手作りの歓迎が参加者の気持ちをなごませる。抽選会では三島牛の子牛1頭が賞品で、これも三島牛の大きな宣伝になっている。ヨットレース参加者は世界中の海を駆け巡る人々であり、三島村の名前はヨットにのって世界中に広まっていく。

離島の小さな村が始めた三島カップは全国的な評価を受け、1994年に「潤いと活力あるまちづくり優良地方公共団体部門」で自治大臣賞を、「地域づくり全国交流会議」で国土庁長官賞を受賞した。

三島カップレースに思いを寄せる人々は、「アメリカズ・カップ」に対抗する「三島カップ」というのが目標だ。

タとそのグループが1994年8月に硫黄島にやってきた。以来、三島村の子供たちとママディさんとのジャンベを通じた交流が始まった。ママディさんにジャンベを習った子供たちはそのリズムのとりこになり、三島村がジャンベで盛り上がった。子供たちはママディさんといっしょに2週間の演奏旅行に出



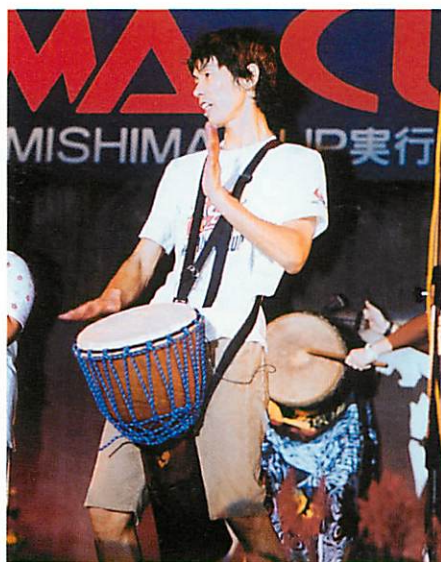
かけ、名瀬市、岡山県大佐町、美星町、広島市とステージに立ち、三島村の子供たちは大きな自信をつけた。もちろん三島村にも古くからの伝統芸能がある。それらに加えて、西アフリカのジャンベが新たな伝統芸能になりつつある。1998年には4人の中学生がギニアに派遣され、交流したのもジャンベの縁である。ママディさんはずっと三島村にやってくる。交流会「三島村ジャンベ・アンサンブル」ではママディさんと子供たちがジャンベ演奏とアフリカン・ダンスの輪を繰り広げる。離島の子供た

ちがまったく異文化のアフリカの心と交わるという、日本でもめずらしい体験だ。

2000年10月に硫黄島で開催された「国際火山ガス野外研究会」でも、硫黄島のジャンベ楽団「WASSADA」がジャンベ演奏で世界からの参加者と島民との交流を盛り上げた。

ジャンベが広げた子供たちの広い視野は、宇宙へも広がる。インターネットによる世界中との通信が可能となった現在、離島であることは情報発信・受信に以前ほどには不利ではない。硫黄島の三島小中学校と黒島の片泊小中学校は文部科学省の「へき地学校マルチメディア活用研究事業」の指定校となり、インターネットを使って遠くの学校との共同授業などの実験を行っている。三島小中学校と鹿児島市とをテレビ会議システムでつないで、鹿児島市の会場へジャンベ演奏を披露したり、あるいは黒島の黒里小中学校ではスペースシャトルの宇宙飛行士・毛利衛さんと交信したりもしている。

通信システムの急速な進歩は、三島村にも大きな影響を及ぼそうだ。狭い離島が世界とつながることが容易になった。



ジャンベの演奏 ©三島村役場

## 観光立村

外の世界とのつながりのひろがり、三島村の観光立村への希望につながる。かつて、三島村は大手観光開発企業を誘致し、リゾート開発を行ったあげく、失敗した苦い体験がある。これからの社会は大規模リゾートの時代ではなく、多くの人々が求めているのは、心が癒される場である。三島村は荒されていない自然と多くの伝統芸能、歴史的文化遺産を持っている。これらは、かけがえのない財産であり、観光資源となる。開発行為はこれらの財産を消滅させてしまう。硫黄島の海岸の露天温泉は大変な魅力であり、何もない島の草原や山肌、360度眼下に見渡せる海は疲れた人々の心を癒す。硫黄島の活火山は単調な島の自然に強烈なインパクトを与える。このようなところはめったにない。

自然が好きな人には、三島村すべてが魅力的だろう。釣りが好きな人には、全島まさに天国だ。歴史が好きな人には、硫黄島の俊寛や平家の落人に関する遺跡や伝説に引き込まれる。グルメが好

きな人には、新鮮な魚、タケノコ料理、それに焼酎と、舌と喉にこたえられない楽しみがある。伝統芸能が好きな人には、硫黄島の八朔踊り、竹島の馬方踊り、黒島の面踊りと、踊りに歌に限りがない。バードウォッチングが好きな人には、島内の森に住むさまざまな野鳥、それに硫黄島の空飛ぶクジャクが迎えてくれる。

現在の宿泊施設は少数の民宿が主である。大型宿泊施設は必要ないし、過去の例から見て、逆効果だろう。観光客は例年 2,500 ～ 3,000 人程度であるが、現在の交通手段である限り、大幅な増加は見込めない。1日当り10人弱という観光客を20人程度にまで引き上げることができれば、観光も村の経済に一定の役割が出てくる。現在の宿泊施設の収容人数の範囲内で、どこまで観光客の増加を計るかが課題となってくる。2001年秋には新型フェリーが就航の予定であり、現在11往復が19往復に増える。新造船就航は観光客の増加につながる可能性がある。外から車が島に持ち込まれ、騒音と事故、環境破壊が生じることを予防する対策も考えねばならない。現在の三島村の生き方を見ていると、現在

---

の環境を守りながら、観光を目指すことが可能になると思う。

三島村には大型観光は似合わない。団体ツアーも似合わない。今のような素朴な民宿があり、やさしい宿のおばさんがいればよい。人々はそれを求めてやってくるのだから。三島村の価値を認めて、

## 三島村の課題

---

外の世界とのつながりだけではだめである。国際交流と観光だけでは人々は生きていけない。三島村に住む人々が安心して、豊かに、楽しく暮らせることが根底になければならない。高齢者の多い島の村として、三島村はさまざまな施策を行っている。独居老人が緊急時にブザーを押せば、役場や看護婦につながる緊急通報装置は全老人家庭に設置されている。各地区に老人福祉センター、生活センター、福祉農園が設けられた。これらは三島村だけではないかもしれないが、高齢者が非常に多い三島村では必須の施設であり、その整備が計られてきた。2000年4

三島村が好きになった人々が繰り返して訪れるようになりピーター型のエコ・ツーリズムがこれからの三島村観光のあるべき姿だと考える。硫黄島の飛行場を使った航空機と新造フェリーとを併用した三島村へのツアーができれば、非常に魅力的な場所となるだろう。

月に始まった介護保険を補完する施設として、これらの福祉センターや生活センターはミニ介護施設へ改修され、バリアフリー化があわせて進められている。島で生まれ、島で晩年を過ごす高齢者たちが安心して暮らせるように、三島村ではがんばっている。

三島村の子供たちが、こうあってほしい村の姿を書いている。それらは、自然に恵まれた美しい島であり、病気になっても安心して暮らせる島であり、交通の便利な島であり、交流の島である。

21世紀に向けた三島村は、これらの夢がかなえられる島になるために「GENKI UP」し続けている。









## 第3章

日本でいちばん宇宙に近い島

# 種子島

野呂忠秀

(鹿児島大学水産学部海洋資源環境教育センター)





種子島宇宙センターのロケット打ち上げ ©宇宙開発事業団 (NASDA)

「種子島宇宙センター」は、日本宇宙開発事業団（National Space Development Agency of Japan, NASDA）が実用衛星を打上げるために作ったロケット基地である。種子島南端の南種子町に1967年にオープンした総面積860万km<sup>2</sup>のこの宇宙センターは、フロリダにある米国航空宇宙局NASAの「ケネディ宇宙センター」の日本版。この基地からH-I型とH-II型のロケットによってこれまでに打ち上げられた人工衛星は合計39機であるが、これらは赤道の上空に静止して日本の衛星放送や気象予報を支えてきた。

1950年代の3年間を高校教師としてここ南種子町で過ごした鹿児島大学の佐藤守教授（水産分析化学）は、初めて島に着任した時に乗ったバスの乗客が裸足だったことや、船で6時間もかけて鹿児島市から運んだ電蓄（レコードプレーヤー）が不安定な電圧のため役に立たなかったことを覚えている。

しかし、1989年に就航した高速船「トッピー」は、鹿児島市と種子島の距離をわずか1時間に短縮した。種子島では島の周辺で漁獲されるトビウオのことをトッピーというが、

この高速船はその名に由来する。

日本の南の端にあるここ種子島がロケット基地として選ばれた理由は、人工衛星の静止軌道である赤道に近いことと、建設のために必要な広い国有地が残っていたことであった。現在、日本でもっとも南に位置するのは沖縄県の島々である。しかし、当時まだ米国に占領されていた沖縄にロケット基地を建設することは不可能なことであった。

種子島は農業の島である。今も島の人口の三分の一はサトウキビの栽培に従事しており、南種子町一帯は温暖な気候を利用した早場米や赤米の生産で有名だ。しかし、種子島宇宙センターの建設によって、人口わずか数千人の農業の町、南種子町は、日本の先端技



鹿児島市と種子島西之表市を1時間で  
つなく高速船トッピー ©南海郵船

---

術を結集した宇宙開発事業を支える町に変身した。現在、種子島宇宙センターで働くNASDAの職員は60人。しかし、ロケットの打上げの前後には、技術者や報道関係者あわせて400人がこの町に押し寄せ、その中には外国からの科学者や技術者もいる。

ロケット射場建設のため周辺の市町村に移住を余儀なくされた住民は、ロケット基地内の作業員としてNASDAに職を得たり、周辺のホテルや民宿で働く。南種子町の麻生孝雄氏夫妻は、4階建てのホテル「サンパール」を経営する。部屋

数30程のこのホテルでは大阪や名古屋から来た単身赴任の技術者が家族的な雰囲気の中でくつろぐ。

種子島宇宙センターに隣接する宇宙科学技術館を訪れる観光客は年間7万人。この島を訪れる観光客のほとんどが必ず訪れる観光スポットである。日本本土とはひと味違うエメラルドグリーンの海と、手入れの行き届いた芝生に囲まれた近代的なロケット基地を背に建てられたこの博物館の中に入ると、種子島が日本で宇宙にいちばん近い場所にあることを実感する。

## 日本の歴史を 変えた ポルトガルの 火縄銃

---

明(中国)の交易船が種子島の南端にある門倉岬に漂着したのは1543年。門倉岬に上陸した船員の取調べにあたった当時の村長が、漢文の読み書きに長じていた

ことは、この交易船にとっても、またそれ以後の日本の歴史にとっても幸いなことであった。

中国語と日本語による会話は成り立たない。しかし、中国人と日本人は筆談が可能である。かつてラテン語の読み書きがヨーロッパ知識人の教養であったのと同じく、当時の日本の知識人にとって、漢字で書かれた中国文学を原文で読みこなすことは素養の一つであった。紀元前に中国で生まれた漢字は朝鮮や日本に伝わり、朝鮮語や日本語を記録する文字として使われ続





種子島銃の射撃風景  
 (西之表市の鉄砲まつり)  
 ©西之表市役所

け今に至っている。英語のアルファベットのような表音文字と異なり、漢字はひとつひとつの文字が意味を持つ表意文字である。現代の日本人にとって、中国語の出版物を中国風に発音することはできないが、簡単な文章ならば少なくとも20～30%程度の内容を理解できる。

この種子島の南端に漂着した交易船が明の船であることは、島の村長と中国人船員が砂浜に杖で書いた漢字の筆談で明らかになった。さらに島人を驚かせたのは、東洋人とは全く違う西洋人の容貌であったが、それにもまして彼らが携えていた細長い筒状の武器であった。それは、雷のような音を発し、瞬時にして数十mも離れた的を破壊するこれまでに見たこともない最新兵器だったからである。

種子島藩の領主、種子島時堯<sup>ときあき</sup>はこの最新兵器の威力に感じ入り、金2千枚という当時としては破格の値段で2挺の鉄砲を買い求めた。その扱いに習熟した時堯は、この鉄砲の製造を思い立ち、家臣の刀鍛冶、八板金兵衛に鉄砲の製作を、篠川小次郎に火薬の製造を命じた。

種子島では当時既に製鉄や鍛冶が行われていた。島の回りの砂浜は今も黒い模様を呈しているが、これは砂に含まれている砂鉄によるものであり、豊富な木材から作った良質の木炭を燃料として、10世紀頃には既に製鉄が行われていたことが明らかになっている。その後、15世紀には、本土から鉄山師を招いて製鉄業が始り、鉄砲伝来の頃には刀や農機具などが種子島島内ですでに作られていた。

この種子島の製鉄技術と刀鍛冶の技にとって、南蛮渡来の鉄砲の複製を作ることはさほど難しいことではなかった。当時の刀鍛冶には銃身の根元に使うネジを作る技術はなかったが、その作り方も翌年種子島に渡来したポルトガル船の鍛冶職人から習い、種子島藩では1年後には数十挺の鉄砲製造に成功し、薩摩の豪族との戦いに用いて戦果を挙げている。

この種子島産の火縄銃はその名もずばり「種子島」と呼ばれ、鉄砲伝来30年後には、日本の都京都に近い大阪や堺で大量に作られるようになった。やがて、戦国時代の領主たちは、この「種子島」を競って買い求めたのである。

それまで、日本各地の領主たちが勢力を広げるために繰り広げた大小様々の戦いは、刀や弓ややりを武器とし一騎討ちを基本とするものであった。そこに出現したポルト

ガル伝来の最新兵器「種子島」は、この個人戦を集団戦に一変させた。勝利の女神は種子島銃を多く買い揃えた側に微笑んだのである。

最新兵器「種子島」の活躍によって、大名たちの勢力の均衡が大きく変化し、日本が将軍のもとで政治的に統一される時代を迎えるが、この統一に拍車をかけた最新兵器が、京都から千kmも離れた辺境の小さな島から始ったことは歴史の事実として興味ぶかい。

ポルトガルの鉄砲が種子島に上陸したことは、日本に初めてヨーロッパ大陸の文明が伝わったことでもあり、1549年には日本で初めてキリスト教の伝道を行ったイエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエルもマラッカ、マカオ、種子島を経て日本の薩摩に上陸した。英国ではエリザベス1世の時代を迎え、スペインやポルトガルがマニラやマカオを建設した頃のことであった。

## 種子バサミ

にしのおもて

西之表市は人口2万人、種子島最大の都市である。この西之表

市の路地にたたずむ牧瀬刃物製作所では、牧瀬義文氏が弟の博文氏とともに昔ながらの方法をかたくなに守りながら種子島特産のハサミや包丁を作り続けている。かれらは種子島に37代続いた刀鍛冶



の子孫である。

明治維新後に種子島では種子島銃の製造が禁止されたが、その鉄砲鍛冶がハサミや包丁の製造に転じた。1900年当時、種子島には家内工業的な規模でハサミを作る職人が80人ほどいた。しかし今、種子バサミを作っているのは、牧瀬兄弟の外、わずかに3軒だけとなった。父母から習い覚えた昔ながらの製法を受け継いで、牧瀬刃物製作所では、毎日10丁の種子バサミをすべて手作りで打ち上げる。

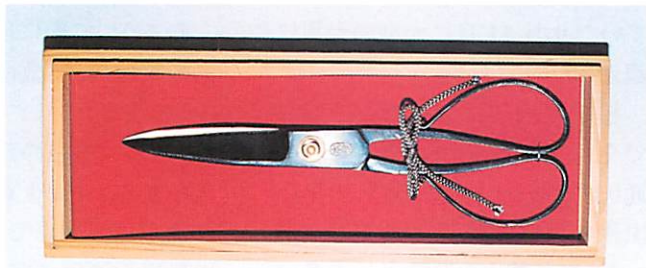
独特なデザインの種子バサミは、漢時代の中国のハサミの様式を伝えるものであり、鉄砲伝来の時に、明の交易船によってもたらされたものとされている。右利き、左利きに関係なく使えることや、使えば使うほどに刃の噛み合わせが良くなることから、その独特な切れ味を求め

た愛好者も多く、種子島を訪れる観光客の伝統工芸品に指定され土産物としても人気がある。

種子島銃と同じように、種子バサミも、かつては島内の鍛冶職人が品質のよい砂鉄を原料として作っ



種子バサミを打つ（牧瀬刃物製作所）  
©西之表市役所



種子バサミ  
©西之表市役所

たものである。デザインのユニークさと使いやすさから、日常的に重宝がられている種子バサミではあるが、原料として用いられる鋼鉄の品質が近代的なハサミに比べ劣っていることを指摘する刃物業者もいる。

牧瀬氏が種バサミを作るかたわら打ち上げる種子包丁も、この

## 米国難破船 カシミア号

米国の木造帆船カシミア号(936t)が石油3万樽を満載し神戸に向けてフィラデルフィアを船出したのは1885年(明治18年)4月のことであった。しかし、アフリカ南端の喜望峰を越え、ようやく種子島の南東300kmの沖を航行していた9月11日に大型の台風遭遇したのである。

種子島周辺はフィリピンの近海で発生する台風が北上する際の通り道であるとともに、流れの早い黒潮と複雑な離島の地形とがあいまって、昔から海難事故の多い

島の周辺に多いトビウオや魚を料理するのに使い勝手がよいことから、島内では家庭の主婦や漁業者に好んで使われている。彼らが作るプロ仕様の包丁は、一年近く待たないと手に入れることができない注文生産の逸品である。

ことで船乗りたちに恐れられており、難破船を救助した多くの歴史が島には残っている。

当時の貨物船としては大型のカシミア号ではあったが、台風の威力の前ではすべてのマストを失い、13日の未明にはアレキサンダー・ニコル船長と2名の航海士も波にさらわれ行方不明となった。嵐が去った後のカシミア号は、もはや船体の破損と浸水が著しく、水や食糧も底をつき、航行不能の状況におちいった。

かろうじて船に取り残された12名の乗組員は、救命ボートと急ごしらえの筏<sup>いかだ</sup>でカシミア号を脱出、ボートの7名は現在の西之表市立山<sup>たちやま</sup>に、筏の5名はその北の伊関<sup>いせき</sup>にそれぞれ漂着し、海岸で働いていた近くの農民や漁民に発見された。

立山と伊関の村人たちは、救助した乗組員達の介護に総出であったという。この時、立山の小学校教諭は救助した乗組員の中にいた中国人と漢字での筆談に成功、伊関でも小学校の教諭が英語による筆談で、彼らが遭難船の乗組員であることを知った。その後、救助された乗組員たちは船で鹿児島市に渡り、鹿児島県庁のはからいで、神戸と横浜を經由して無事米国に帰国することができた。無事帰国したカシミア号の乗組員の中にはニコル船長の息子も含まれており、その後一世紀を経た1980年に南日本新聞の記者（現社長）、ありぞのじゅんや有囿純也氏によってその子孫が探し出されている。

天気予報も航海術も未発達で、海賊や住民が難破船を略奪することも多かった当時、この種子島の島民がカシミア号の乗組員に示した善意は、米国のみならず世界の人々に大きな感動を与えた。

この善意をたたえるために、米国政府はカシミア号乗組員の救助にあたった村民に邦貨50円と金メダルを送って感謝の意を示したが、その3年後の明治21年に時のクリブランド米国大統領は、5千米ドル（邦貨6千円、2001年現在の2



カシミア号乗組員の救助に感謝し、米国政府が種子島の村民に贈ったメダル（種子島開発総合資料館収蔵）

©種子島開発総合資料館

億円に相当)を村に贈与した。カシミア号乗組員の救助にあたった2つの地区ではこの贈与金により教育基金を設立し、その利息を永く学校の運営費や奨学金にあてた。西之表市あんじょうの安城小学校と伊関小学校の校庭には、1890年にカシミア号遭難の顛末を述べた紀徳碑が建立され現在に至っているが、特に伊関では今もカシミア号乗組員救助の9月22日には地区をあげての記念祭を行っている。









# 第4章

世界遺産の島

# 屋久島

田島康弘  
(鹿児島大学教育学部)



屋久島の世界との結びつきを見ると、日本が鎖国政策をとっていた1708年、ローマ法王庁の宣教師ジョアン・バディスタ・シドッチがキリスト教の布教のために屋久島南部に上陸している。彼はまげを結び武士に変装したが、捕らえられて江戸に送られた。シドッチを取り調べた新井白石はシドッチの知識や見聞の広さに感服し、その内容を『西洋紀聞』等にまとめている。

また、1914年、アメリカの植物学者アーネスト・ヘンリー・ウイルソンが来島し、植物の種類が多いこと、生態が特殊で貴重なことなどを学会で報告し、屋久島をはじめ世界に紹介している。彼によって紹介されたヤクスギの切り株のうち最大のものがウイルソン株と呼ばれている。

しかし、なんと言っても屋久島を世界的に有名にしたのは、世界遺産への登録であろう。屋久島は1993年12月、ユネスコの世界遺産条約に基づく自然遺産として、日本ではじめて登録され、世界に知られることになった。屋久島のすぐれた自然が普遍的な価値を持つものとして世界的に評価されたわけである。屋久島の自然の特殊性やその貴重さは世界遺産への



登録理由に要約されているので、それを引用しておこう。

「屋久島は中心部に九州の最高峰宮之浦岳(1,935m)をはじめとする高峰が聳える山岳島であり、かつ年間4,000～10,000mmもの多雨に恵まれていること等から、樹齢数千年のヤクスギをはじめとして極めて特殊な森林植生を有している。



洋上アルプスと言われる屋久島の森林景観  
©田島康弘

海岸付近のガジュマル、アコウ等の亜熱帯植物から、タブ、シイ、カシ等の暖帯、モミ、ヤマグルマ等の温帯、更にヤクザサ、シャクナゲ等の亜高山帯に及ぶ植生の垂直分布が顕著にみられ、また多くの固有植物、北限・南限植物が自生していること等特異な生態系を構成している。

特に本地域の傑出した自然の特徴として樹齢数千年に及ぶとさ

れる直径3～5mにも達するヤクスギがあげられ、老齢の巨樹林は生態的にも、かつ形態的にも世界的に貴重な天然林と考えられる。

さらに、当地域には、アカヒゲ、アカコッコ(危急種)等絶滅の恐れのある動植物が生息し、自生している。」

島民は、自分たちが生活する舞台である島の自然が、国際的にすぐれて普遍的な価値を持つものとして高く評価されたことを喜び、これを自分たちが持つ資産であると捉え、この資産の価値を高めながら、これをうまく利用し、生活水準を引き上げてゆくことを望んでいる。

また、有史以来島民は、この自然の中で自然を利用し、自然と調和して暮らしてきたのであり、島民の生活はこの自然と切り離すことのできない一体化されたものである。そこで次に、この自然の中で営まれてきた屋久島島民の生活や暮らしについて捉えてみよう。

---

## くらしの変遷

---

屋久島は洋上アルプスとも言われるように、海の中に聳えたつ山岳の島で、平地は少ない。1640年以降、それまで神木として伐採されてこなかった屋久杉の利用が始まると、この屋久杉から作られる平木が島の主要生産物となり、貢納物(税)もこの平木で行われるようになった。江戸時代の記録である『三国名勝図絵』によれば「屋久島は全島が山であるから田畑が少い。人々は山で杉の木を伐り、海で魚を採るので生活は豊かである。人々の心は純朴で、夜は戸を閉めることもなく、道に落ちていた他人の物を拾い取るものもない」と伝えており、山と海の幸に依存した平穏な生活であった。

しかし、1875年開始された「地租改正」により、集落とその周辺の田畑を除く屋久島の土地のほとんどが官有地にされ、盗伐も禁止されて島民は山から締め出されてしまった。それでもカツオ漁が盛んな頃はなんとか生活ができたが、1900年頃からはカツオ漁が内地発動機漁船のために不漁となり、

島民は食の確保のために開田開畑を始め、サトウキビの導入など農業にも力を入れることになったのである。

1920年代後半のころからは一部入山が可となった山での木炭の生産と海でのトビウオ漁、それに畑でのサトウキビとカライモが生活を支えた。この頃の屋久島の生活は海に10日、里に10日、山に10日と言われ、1960年代までは、こうした生活が続いた。

しかしながら1970年代に入り、トビウオ漁が不漁となり、また、価格の低さから大型製糖工場やでん粉工場が閉鎖されて産業基盤の大きな転換期を迎えた。農業はエンドウ、パレイショなどの商品作物やボンカン、タンカン、ビワなどの果物が中心になってきた。また、観光客の増加による宿泊施設や屋久杉土埋木加工業の振興など、観光サービス業が新たな産業として注目されてくる。1964年には、国立公園の指定を受け、1971年にはヤクスギランドもオープンし、さらには小型飛行機(YS11型機)による空路の開設や高速船ジェットフォイル「トッピー」の就航も行われて、交通の便も改善されてきた。世界遺産への登録は観光地としての

魅力をさらに高めたものと言えよう。

しかし、この転換期を契機にして、農家の離農転出が顕著になり、それ以前の1960年代から始まっていた若年層の人口流出とあわせて、屋久島の人口は1960年の約24,000人をピークに減少の一途をたどり、島民の高齢化も進

んできていることが島の抱える大きな問題である。こうした状況の中で行政は観光と第1次産業の振興を町政の基本方針とし、観光地の整備や交通の整備を行い、また農業では果樹の他、ガジュツ、お茶などの商品作物に力を入れてきている。



資料：各年国勢調査より筆者作成

## 今日の 第1次産業の姿

ポンカンは1924年、当時の村  
会議員であった黒葛原兼成が台  
湾から原木をもってきたことに始ま  
る。はじめは評判が良くなかった  
が、次第に栽培農家が増えて、今

では「屋久島ポンカン」として有名  
になった。1970年頃から、販売時  
期のずれるタンカンも導入され、今  
日ではポンカンと肩を並べる程に  
まで生産を伸ばしてきている。

しかし、近年ヤクザルによる被  
害が次第にひどくなってきており、  
農家は樹園地のまわりを網や電気  
柵で囲ったりしてはいるが、側溝  
から侵入したりして、十分な対策に



はなっていない。

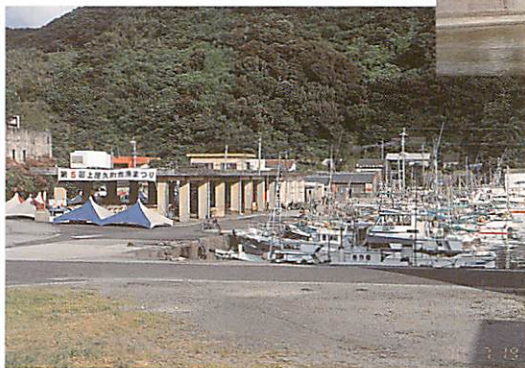
また、胃腸薬の原料である「ガジュツ」の栽培も屋久島各地で見られ、島内の製薬工場で薬に製造されて全国に出荷されている。

かつて盛んであった水産業は、近年は漁獲量も年々減少し、漁業に従事する人も少なくなっているが、エビの内水面養殖の他、年間を通じてのサバ漁や5～6月に集中するトビウオ漁などが行われているに過ぎない。

こうした中で、一漆<sup>いっそう</sup>のサバ節工場などは原料のサバが不足し、枕崎あたりからサバを購入している

状況である。

この他、島内には屋久杉加工業者が約20社程存在し、工芸品の製作に従事している。原料の屋久杉は現在伐採を禁止されているので、「土埋木」を原料として使用している。「土埋木」というのはかつて伐採した屋久杉の切り株のことで、1000年以上の屋久杉の年輪は緻密で、樹脂分を多く含むため、腐らずに残っている。こうした特徴を生かして美しい木目のつぼや家具類などの工芸品が作られている。



漁港風景 ©田島康弘



サバ節工場 ©田島康弘



## 観光・サービス 産業の 新たな動き

屋久島への観光目的の入込客は、1975年の54,590人から1999年の153,503人へと約3倍に増えており、とくに、高速船ジェットフォイルの就航した1989年度から急激に増加してきている。この内訳は船による客が主で、航空機による客は船客の3分の1程度であったが、ジェットフォイル「トッピー」の就航以降はさらに船による客の増加が著しい。

季節的には、7・8月次いで5月に多く、12～2月の冬期の各月はピーク月の8月の半分以下になる。男女の比率に大きな差はないが、年齢的には20代、次いで10代の若者が多い。宿泊日数は2泊が最も多く、次いで1泊、3泊と続いている。屋久島観光のハイライトとも言える縄文杉登山者は年間1万人以上と推定されているが、これはほぼ一日がかりの登山コースであり、一般観光客は登山の代替として、バスでも行けるヤクスギラ

ンドや白谷雲水峡を訪れる者が多い。

宿泊施設の総収容能力は、2,124人（平成9年11月現在）であり、種類別では民宿が最も多く43軒、旅館が9軒、ホテル6軒などが主なものである。この他、公営施設（国民宿舎）1、民間ユースホステル1、ペンション4、ビジネスホテル2などがある。

とくに1990年代に民宿の増加が目立っており、地域経済における観光・サービス業の比重の高まりを示す1指標と言えよう。

この他、観光に関連した産業に前述の屋久杉加工業やみやげの店などがあり、また、最高峰宮之浦岳や縄文杉登山を案内する案内業者（ガイド）も数十名にのぼると言われ無視することができなくなってきている。また、屋久島のすぐれた自然を生かし、この自然の中でとけあって暮らしを営んできた人々の知恵を学ぶ新しい観光の姿であるエコツーリズムの方向が模索されるようになってきた。

---

## 行政による とりくみ

---

屋久島の世界遺産への登録の動きのなかで、行政機関である地元の上屋久町と屋久町の両町、鹿児島県、国は積極的に動いた。とくに鹿児島県は屋久島環境文化村構想をかかげ、積極的に取り組んだ。

この構想は、優れた自然を引き継ぎながら、地域の人々の生活を支え、豊かにしていくことが求められている屋久島で、従来型の発想である開発か保護かではなく、人と自然との新たな関係すなわち共生の在り方を模索しようとするものであり、言い換えると、屋久島環境文化村の基本理念は「共生と循環」という思想のもとに新たな地域づくりをめざすというものである。

こうした構想の下に、鹿児島県はその拠点として上屋久町に「屋久島環境文化村センター」、屋久町に「屋久島環境文化研修センター」を建設し、この構想の推進に当たっている。前者は屋久島の優れた自然とそこに住む人々の生活の全体を紹介する博物館的なも

のであり、また、後者は環境学習を学び、また体験もできる宿泊が可能な施設となっている。

この他、国は屋久町に「屋久島世界遺産センター」を建設し、また、屋久町も屋久杉の歴史を中心とした展示施設である「屋久町立屋久杉自然館」を建設している。

次に、地元両町による近年の循環型社会をめざした新たな動きをみよう。

世界自然遺産に登録された屋久島は「人と自然との共生」を掲げ「ゼロエミッション（廃棄物ゼロ）」に取り組んでいる。この具体化として、上屋久・屋久両町は1999年3月、資源循環型社会をめざす「エコタウンプラン」をまとめた。その目標は1998年度には15.3%にすぎなかったゴミの資源化率を2003年度までに99.2%に引き上げることである。

これを受けて屋久町で取り組んでいることの一つは廃食油を回収し、車の燃料として再利用する取組みであり、町は食用油をディーゼルエンジン燃料に再生する装置を導入した。もう一つの取組みは、発泡スチロールのリサイクルである。発泡スチロールを分別収集し、薬品に溶かした後、鹿児島

市の民間業者に送っている。

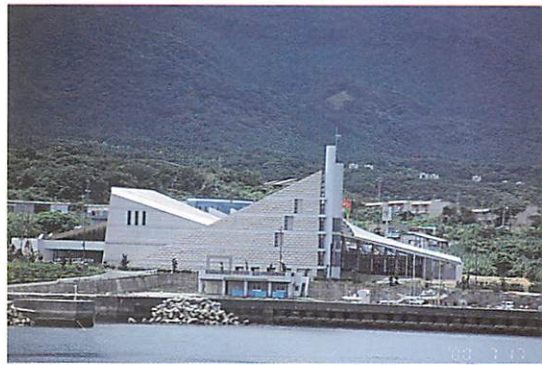
上屋久町では1998年から生ゴミの堆肥化に取り組んでいる。それまでは可燃ゴミとして焼却していたが、焼却炉の温度が下がり、ダイオキシンの発生の可能性が高まるため、生ゴミを分別し、堆肥化を始めたのである。できた堆肥は15kg200円で販売されている。この他、上屋久町では二酸化炭素を出すガソリンに代る電気自動車の使用を奨励し、町内には3か所の充電サービスステーションが設置されている。

「屋久島は地図上では点にすぎ

## 出郷者の帰郷(Uターン) と 島外者の来住(Iターン)

世界遺産に登録された今日の屋久島を語る際に、一度島を出て都会で生活し、やがて帰郷した人々が果たした役割を無視することではできない。

日本経済の高度成長期と言われる1960年代頃から多くの若者



屋久島環境文化村センター ©田島康弘

ない小さな島であるが、持続可能な循環型社会を世界に発信する気概をもって取り組みたい」と役場環境政策課のT氏は語っている。

が島を出て行ったが、ちょうどその頃は、島の遺産の中でも最も貴重な遺産である樹齢1000年を超える屋久杉が、次々と伐採されていった時期でもあった。ヤクスギの伐採は多くの島民の生活を一時的に支えはしたが、いずれヤクスギが伐り尽くされることは目に見えており、また、それは他に類をみない貴重な資源の消滅を意味した。

こうした島内の状況を見るに見かねて、一度出郷した出身者が帰郷するようになったのは1970年頃からである。帰郷した彼らは「屋



屋久島に来住した人々 ©田島康弘

久島を守る会」を結成し、屋久杉の伐採に反対する運動を起こした。この運動は屋久杉の伐採で生活している多くの島民と対立するものであったため、困難をきわめた。運動も思うようには進まなかった。しかし、結果としてはこの運動により西部林道地区をはじめとした自然林を残す一部の地域が、伐採から守られることになったのである。また、屋久杉の伐採も禁止されることになった。

帰郷者を中心とした島民自身によるこの屋久島の自然を守る運動は、今日の世界遺産への登録の動きの先がけとなったと言うことができよう。

外からの影響としてあげられるもう一つは、近年とくに1990年以降顕著となった、島外からの来住居住者の増大である。これまでずっと転出超過であった屋久島で1990年代には転入の方が多くなる年も見られるようになり、従って総人口も、特に屋久町では増加の傾向すら見られるようになってきている。

屋久町に入った来住者の特徴としては、それまで都会で生活していた定年前後の年齢層の者が、屋久島の自然の中での生活に惹かれて土地を購入し、夫婦で住み着き生活を始めるというタイプが多い。中にはホテルの従業員としての仕

#### 屋久町への来住の理由

理 由	世帯数
旅行で来て気に入った	5
海、山、水、釣りの魅力	4
南の暖かい所に住みたかった	4
自給自足的田舎暮らしを求めて	2
世界遺産で有名だったので	1
旅行に来て分譲地を買ってしまったので	1
親戚がいたので	2
定年後の第2の仕事求めて	1
土地の人の対応が良かったので	1
計	21

資料：筆者のアンケート調査による（200年7月実施）



事や民宿の経営を始める者もいるが、一般に定職をもつ者は少なく、仕事をするとしても、ポンカンやタンカンの収穫作業で働く程度である。それまでの地域社会の伝統やしきたり等の面で、来住者が集落民と摩擦を起こすケースも見られるが、

他方では来住者が中心となって、集落のホームページを作成し、農産物の通信販売や嫁不足問題への取組みなど諸問題の解決に取り組むような積極的な面も見られ、従来の集落に新たな刺激を与えている。

## 島の将来に つながる教育

世界的に価値あるものとして認められた優れた自然環境を資産として活用し、また、こうした環境を守るためにもゴミを出さない循環型社会をめざす屋久島にとって、未来を担う子供達に対する環境教育は、こうした地域づくりの一環として組み入れられるべきものであり、また、エコツーリズムによる新たな観光を創造していく上でも見のがすことのできないものである。

屋久島のただ一つの高等学校である屋久島高校には、国内でも珍しい環境科が新設され、将来環境問題の諸分野で働く有用な人材の育成に着手している。

また、鹿児島県が屋久町に設置

した「屋久島環境文化研修センター」では、県下の小中学生を対象として、屋久島の環境を活用した宿泊を伴う環境体験学習が計画的に実施されており、県の環境教育の一大拠点となっている。とくに島内の小中学生にとっては、日常的な催し物やイベントなど、身近に存在し利用しうる環境教育施設として貴重なものである。

屋久島が進もうとしている方向は、行政が示しているように貴重な自然を資源として守り、活用して、こうした自然と調和した第1次産業を発展させることであり、他方では、優れた自然だけでなく、こうした島民の生活をも資源とする新しい観光産業としてのエコツーリズムの創造であろう。こうした方向が今、屋久島で模索され、追究されており、その動向が注目されるところである。





# 第5章

明日を模索する

# 十島村

河合 溪

(鹿児島大学多島園研究センター)





“フェリーとしま”から見た小室の海 ©河合 溪



## トカラ列島

十島村は行政単位でいう十島村はトカラという名を持っている。口之島、中之島、平島、諏訪瀬島、悪石島、小宝島、宝島の有人島7島と無人島5島からなり、北端から南端まで160kmある。日本で一番長い村だ。

トカラは昔から人々や文化の交流が盛んな地で、ヤマト文化圏と琉球文化圏がぶつかる地域にあたる。そして中ノ島では縄文晩期のタチバナ遺跡が発見されている。トカラ列島の島々はすべて火



十島村歴史民族資料館に展示されている  
仮面神ボゼ ©河合 溪

山起源の島嶼である。

「十島村は日本の縮図だよ」と教えられた。北に位置する口之島、中之島、の人は勤勉でまじめだが、南の小宝島や宝島の人はおおらかでのんびりしているためらしい。単純な北と南という違いかと思っただら、他の理由を指摘された。北の島々は山高く海へと崖が突き出ているが、小宝、宝島は隆起サンゴ礁に覆われ山がなだらかだからだという。このような地形の違いが人間性の違いを形成している地元の人々は考えている。

また、十島村は神秘に満ちた村でもある。悪石島では仮面神ボゼが旧暦の7月に現れ、人々の身についた悪魔を追い払ってくれる。そして、多くの平家の落人がこの地域に住み着いたといわれる。宝島には海賊キッドが財宝を隠し、ステイーブンソンの「宝島」はトカラの宝島を題材にして書かれたともいわれている。

この地域は生物学的にも非常に興味深い地域だ。悪石島と小宝島の間には生物の分布の境界を示す渡瀬線があり、温帯の生物と亜熱帯の生物がここを堺に分布を異にする。ハブは渡瀬線以南にしか分布せず、トカラハブは小宝

島、宝島だけに分布する。そして、この地域にはその他多くの貴重な生物が分布する。タモトユリは口之島の固有種で平家の落人が種を着物の袂に入れ持ってきたといわれている。6月下旬から7月上旬にかけ美しい白い花を咲かせている。しかし、昭和初期に乱獲さ

れたため、現在は絶滅危機に瀕している。トカラウマは西洋種の影響を受けていない小型の在来種で、県の天然記念物に指定されている。また、国の天然記念物に指定された野鳥のアカヒゲはトカラ列島を含む南西諸島に分布している。

## 汽船も また 亦道路なり

飛行場を持たない十島村にとって船は生命線だ。村は12の島から成るため、村内にいわゆる普通の道路はあまりない。“汽船も亦道路なり。”「十島丸」就航に尽力した文蘭村長の言葉だ。村民の願いであった村営定期船「十島丸」は1933年就航した。

現在、医者には月に一回、船で来島する。食材、郵便物は船で運ばれる。店のほとんどない十島村では船で都会に出かけ買い物をする。週3回来る船の荷の積み下ろしは各島民が行うため、その時間帯を中心に島の生活は動いている。

2000年に「フェリーとしま」として新船が就航した。悪天候になると以前の船はよく欠航したが、この大型フェリーになり、欠航することはあまりなくなった。そして、少々天候が悪くても船内ではゆれは少なく快適



中ノ島にある航路開拓記念碑 ©河合 溪

である。「他の船が欠航になっても、「としま」は気にせず出航するんだよね」と村民の一人は私に言った。そこに彼の「フェリーとしま」に対する信頼と安心感、そして誇りが感じられた。

以前は船が停泊するための港湾は十分整備されていなかったため、沖に停泊した船の脇に小型船を横付けし人や船荷を積みおろす

## 十島村の産業構造

十島村の主産業は農業・牧畜だが、一次産業従事者は全人工の約20%と低い。その他水産業や公共事業の工事現場で働く人も多いが、一つの職を専業にしている人は少ない。民宿を経営しながら漁に出る人、農業を営みながら電力会社に勤める人などさまざま。「色々やってたほうが安全なんだよ」と漁師は言う。一つの仕事が大きな収入源にならないし一年中できる仕事が少ないことが原因らしい。

かつて村民は自給自足の生活を営んでいた。牧畜では肉用牛として黒毛和牛を放牧している。せりの時

「はしけ」作業が行われていた。小宝島では十年ほど前までこの「はしけ」作業が行われていた。また、以前有人島であった臥蛇島は若者の減少により、この「はしけ」作業を行うことができず無人島化したともいえる。港湾の整備と船舶の安定した運航は村民の生活基盤を支えているのだ。

に子牛は船に乗せられ出荷される。「トカラの牛はたたかれるんだ」と民宿の女主人は言う。理由を問うと船賃がかかるから子牛を持ち帰りたくない。だから、売値が安くても売ってきてしまうらしい。だが、昔は仲買人が来て暴利な値段で買い取っていたため、相場を知らない村民は泣き寝入りをしていた。「だから、今はまだましさ」と他の村民は教えてくれた。最近はトカラヤギの放牧にも力を入れている。村を歩いていると突然目の前に飛び出てくるトカラヤギには驚かされる。また、農業ではビワやとらの尾の栽培にも力を入れている。その様ななか、島の牧畜面積の少なさ、鳥の高齢化、そして運搬にかかるコスト等が産業上大きな問題になっている。

---

## 海に生きる

---

黒潮の流れに沿う十島村にとって、そこに広がる海は大きな資源を内包している。現在十島村では、アオダイ、ハマダイ、キンメダイなど高級魚である底魚の一本釣りが一年中行われている。そして、引き縄でカツオ、サワラ、シイラなどを漁獲している。これは主に村内で消費されている。5月から6月にかけてはトビウオが回遊してくるため、刺し網漁が行われ、主に干物にされている。また、沿岸域ではイセエビ、コウイカ、夜光貝などの素潜り漁も行われている。年末はイセエビの注文が殺到する書き入れ時だ。特に宣伝はしなくても、口コミで注文が舞い込んでくると評判は良いようだ。

しかし、これらの漁業には多くの問題点がある。まず、水産業に従事している人は全人口の10%以下と水産業従事者が少ない点が上げられる。また、過疎化に伴い漁業後継者数も低下傾向にある。これらのため、各漁業が小規模で行われている。春には多くのトビウオが回遊して来るが採算を合わせようとすると規模を大きくせざるをえないため、人手が得られない時は漁

を諦めなくてはならなくなる。また、担保となる物件をあまり持たない十島村民にとって、銀行からなかなか融資を得られず漁船の大型化など規模を拡大することが難しい。そして、離島であるため運搬に時間がかかるため鮮度の良い魚を市場になかなか出せない。同時に市場に出すために余計な船賃が必要である。この地域の夏場は台風の通り道であり、冬は季節風で悪天候になる。これらも大きな負の要因だ。また、沿岸域の漁では島内の工事などにより水質が悪化すると顕著に個体数の減少が見られるという。その上、その他の環境問題も大きく資源量に反映していると考えられる。一方、この地域は良い漁場であるために他の地域から多くの漁船が来て操業しており、かなり漁場が荒れてきたという人もいる。このように零細で漁業を行っているため、良い漁場が目の前に広がっていても、悪天候で漁ができなかったり、大型船でやってくる他県からの漁業者に競争力で負けてしまうのが現状だ。

地元で一本釣りをを行う漁業者は、今後この地域で水産業を発展していくためには、1) 投資による漁船の大型化、2) 漁業に関する詳しい知



識、3) 地域の特性を活かせる魚の知識だと指摘する。今、彼は役場の援助により港に大型の給油施設を設置している。また、投資をして5トンの漁船を操業している。これにより悪天候においても操業でき、1トン船の時に比べ2倍の操業日数が可能になった。また、昨年村営定期船が大型フェリーとなったおかげで、欠航便が減り、魚の出荷が計画的に行えるようになった。これにより、漁獲された魚はすぐに出荷でき、鮮度の良い魚を市場に出すことができる。市場は新鮮な魚を歓迎するため、少ない漁獲量でもすぐに出荷するという。少量でも安定した新鮮な魚の供給は市場への船賃にみあうメリットが得られている。また、彼は台風などで天気が荒れた後が勝負時だという。他地域の漁船はいち早く避難しているため、天候が回復した時すぐに漁場には出てこれない。その時十島村の漁業者が大型船を持っていれば天候が回復傾向にあればすぐに漁を開始できる。地の利を活かせるわけだ。そして、悪天候のため魚が供給されていないこの時にいち早く魚を市場に出荷すれば高い単価で売買される。この様

に大型漁船を持つことで少々天候の荒れた時でも新鮮な魚を供給でき、トカラの魚の評判は上がってきているという。この時も悪天候に強い大型フェリーとしまの運行が大きな味方になる。

これらのことを考えると今後の水産業発展のための対策として、1) 資源対策、2) 船溜や給油施設の整備、3) 後継者の育成、4) 資金対策、5) 安定した輸送手段の確保があげられる。

多くの漁師が昔に比べ資源量はかなり減ってきたと指摘する。禁漁期による漁獲制限が行われている魚種もあるが、資源量調査などを行い「獲る漁業」から「育てる漁業」への意識改革とより一層の試みが必要であろう。また、多くの正しい漁法などの知識を漁民へ伝えることも大切である。多くの島で港湾の整



素潜り漁で漁獲された夜光貝 ©河合 溪

---

備は整ってきたが、給油施設の整備は不十分である。

しかし、これらの項目は計画的に行わねば、環境破壊と沿岸域の資源量の減少をもたらすことを考慮することが大切である。過疎化の進む島において後継者の問題は大きな問題であるが、Uターン者、Iターン者などを含めた人々に将来像を示すことで解決の糸口が見つかるのではないだろうか。十島村は漁業振興のために融資を行っているが、より一層の強化が期待される。最後に、大型フェリーとしまの就航は大きな存在だ。より一層の安定した運行が期待される。

離島の水産業には多くの問題点が指摘されるが、一方でいち早く近

代化が進んでいる。IT化だ。最近では漁船間の交信も無線だけでなく携帯電話が使われるようになってきた。今までのように無線だとすべての会話がすべての漁船に伝わっていた。しかし、現在は島から20マイル以内であれば携帯電話が使えるため、電話をかけたり電子メールを送ることで、伝えたい相手にだけ漁に関する情報などの色々な事を伝えることができる。また、携帯電話を使うことで瞬時にかつ手軽に現在の天気図などの多くの情報を手にいれることができるため、漁の計画を立てやすくなってきた。情報化の波は日本の隅々にまで及んでいる。

---

## 宝の塩

天然塩の生産は十島村にとって大切な産業の一つだ。そして、宝の塩は十島村において大阪などに出荷される数少ない全国区レベルのブランド品だ。十島村では宝島と小宝島で生産が行われているが、現在、宝島で天然塩の生産に従

事するのは3人と小規模の産業だ。

以前、宝島で天然塩の生産は行われていたが、一時期この産業は衰退した。その後、天然塩の生産は4年前の塩の専売が解禁された時から再開されている。現在、天日と風で乾燥させる方法と釜で炊く方法が行われているが、自然乾燥で生産したほうが味はまろやかだという。生産を始めた時に同時に起こった自然食ブームにのり大きく

発展してきた。

天然塩の生産は島の地域性に非常に合っている。なぜなら、海水は島の周りにふんだんにあり、しかも原料費にお金がかからない。そして、島での生産物は消費地に届けるのに時間がかかり消費地に行くまでに鮮度が落ちることがあるが、塩であればいくら時間がかかっても品質が落ちることはない。しかし、今、大きな壁にぶつかっている。同じような考えを持った生産地が増え、競争相手が増えた事だ。そして、日本人のもつ特性、ブームに乗りやすいが同時に飽きやすい点だ。今、自然食としての天然塩のブームは去っている。従って、供給量は増えたが需要は増えていない。これでは事業を拡大させることは難しい。宝島では生産開始時の生産量は年間2トンであったが、採算は取れなかった。その後、規模を拡大し現在年間12トンの塩が生産可能になったが、現在の供給量過剰のた



宝の塩 ©河合 溪

め生産量は5トンに抑えている。

今後、この産業の発展のためには消費者のより一層の開拓が必要不可欠である。だが、離島であるため消費地に遠いことや、小規模産業であるので宣伝にまわす人材がいないため、業者や消費者に直接会い宣伝することが難しい。これに対して、塩生産者はインターネットなどを使い宣伝したり、サンプルを各処に送り消費者を拡大しようとしている。そして、現在は地道に生産を続け、ブームの再来を期待している状態だ。

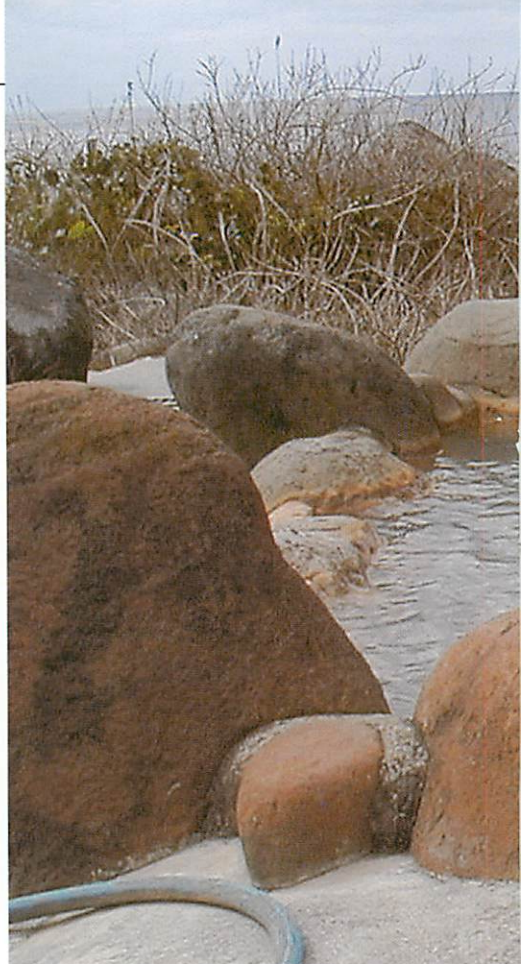
## 将来の展望

トカラ列島は美しい自然を有して

いる。そして、火山列島であるため、多くの温泉が各島にある。神秘性、美しい自然、温泉、おいしい地の食材があれば日本人は集まってくる。行政はこれらを大きな観光資源

としようと考えているが、島民はあまり意識していないようで、そこに大きなギャップが存在するように思う。観光は将来の産業として多くの可能性を秘めているだけに十島村村民の意識改革が必要かもしれない。しかし、一般に観光開発には都会の考えが多く反映されている。島と都会での価値観は大きく異なっており、「島のルール」と「都会のルール」は大きく異なっている。観光開発は地元の意見をよく反映しないとそこには大きな問題が発生するのが現状だ。従って、村民自らが将来の村のあり方を考え、行政との対話を大切にし、共通する考えを持ち物事を進めていかないと観光地十島村の将来は見えてこないであろう。

十島村は高齢化、過疎化、少子化、ごみ、主産業の模索など多くの問題を有している。人口面の対策として、都会の子供を受け入れ島の活性を上げる試み(山海留学)も行われている。山海留学した子供達は多くの喜びを抱え家に帰るが、このシステムには問題も多い。子供達の受け入れ先となる里親が減少してきている点大きい。これにたいして、里親を外部から募集することなどを検討中だ。いずれにせよ、過疎化、高齢化などの人口問題に関し



てはUターン者、Iターン者などを含めた部外者に対してどのように対処していくかが鍵になってくると思われる。また、島民生活の向上には船舶の運航の維持が不可欠である。そして、十島村の今後の発展には運命共同体としての連帯感が大切だ。何処の地域にも道路は大切な交通網であるが、大きな道路が走ってい



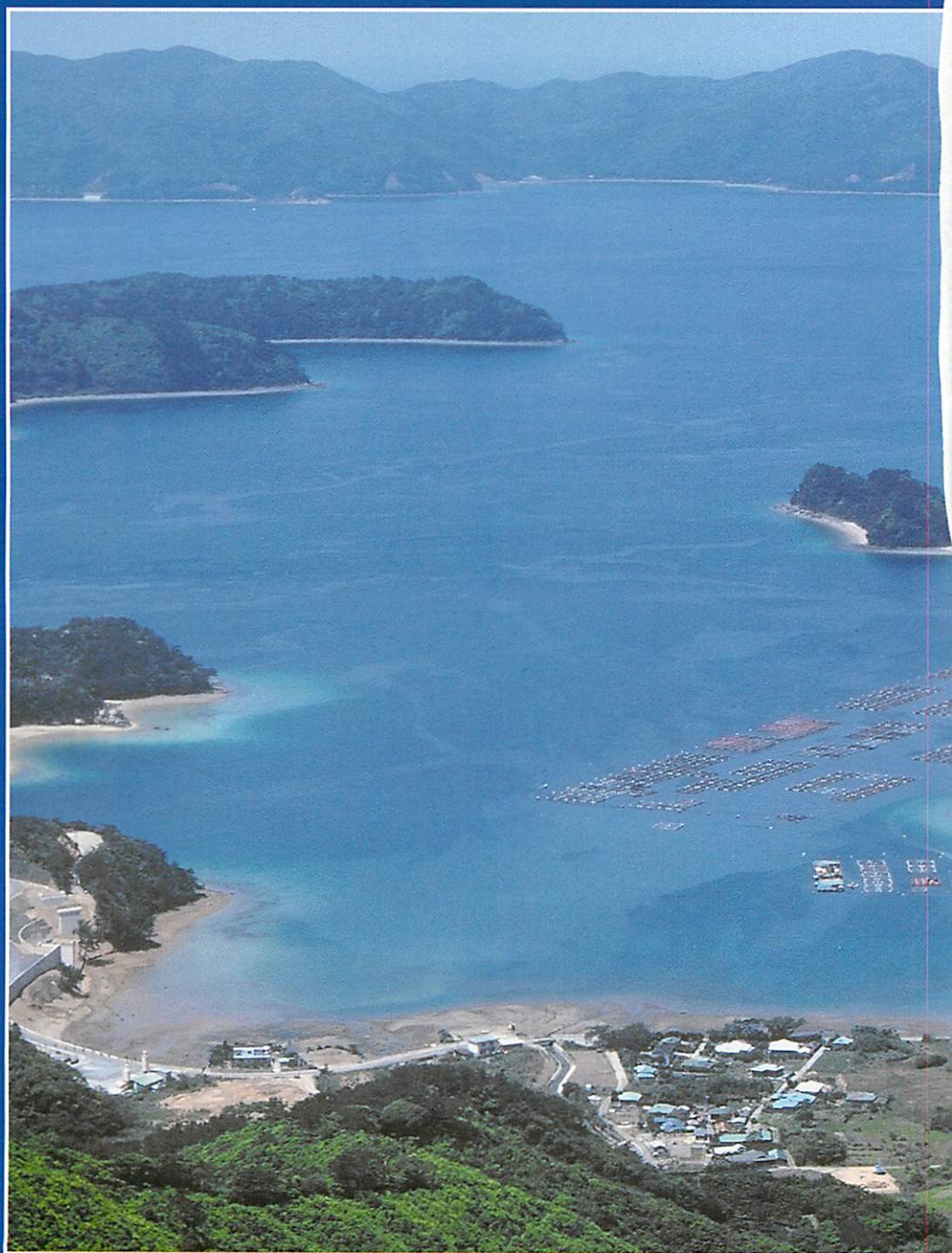


悪石島の露天風呂 ©河合 溪

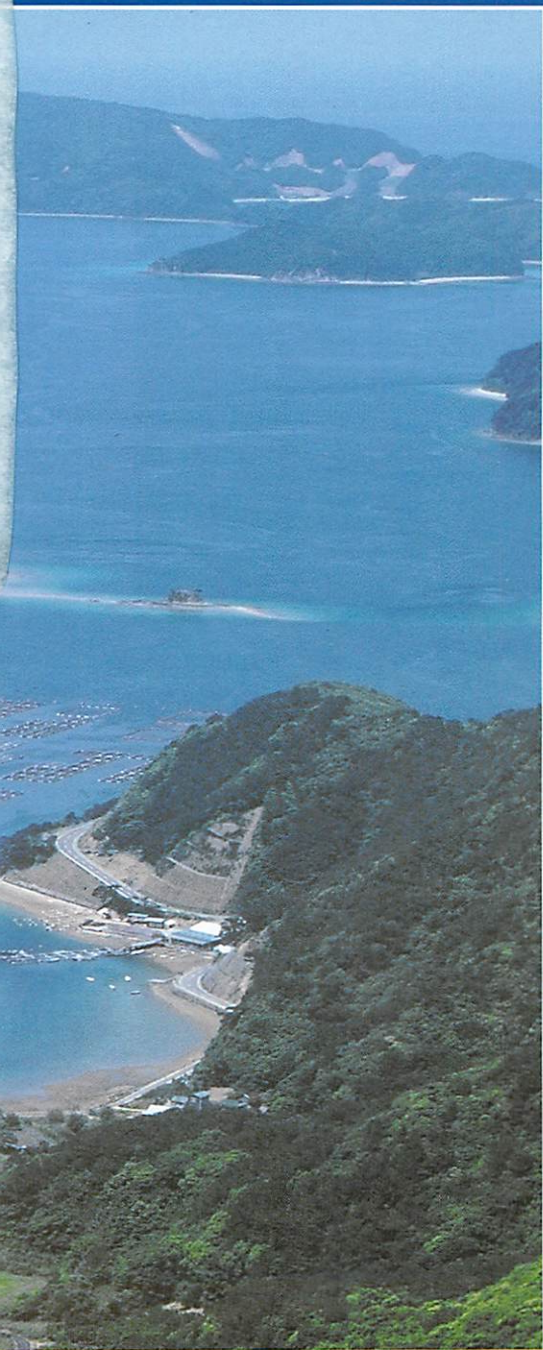
るだけでなく、農道、小道、路地もある。人々は色々な道をたどり、行き来し、交流をしている。“汽船も亦道路なり”の考えを大切にし、フェリーとしまだけに頼るだけでなくもっと多くの道を持つべきであろう。島間で小型船などを運航するなどして、色々な点で交流を深めることが今後の諸可能性を高めるために大切だと思う。

最後に、島の生活は都会に比べすべてがゆっくりと動いているため、十島村発展のためには、将来を見据えた総合的な視点を持ち、「島のルール」と「都会のルール」をうまく調和できる、適切なオーガナイザーが必要不可欠だと考えられる。









# 第6章

東洋のガラパゴス

# 奄美大島

桑原季雄

(鹿児島大学法文学部)



サトイモ畑の農家 ©青山 良氏提供

九州南部から台湾に至る島々を琉球弧という。奄美群島はそのうち北緯 29 度から 27 度にわたって連なる有人 8 島を指す。奄美大島とその周辺 3 島（加計呂麻島、請島、与路島）、喜界島、徳之島、沖永良部島及び与論島である。奄美大島と周辺 3 島を合わせた面積は 818km<sup>2</sup>、奄美群島全体の人口は約 13 万人で、一市十町村からなる。また、奄美大島本島の面積は 719.5km<sup>2</sup>、人口約 7.4 万人で、日本の離島の中で沖縄、佐渡島に次いで 3 番目に大きい島であ

る。湯湾岳（694m）を主峰として、高さ 400m 以上の山々が南北にのびており、海岸近くまで山地が迫る沈降型地形で、海岸は良港に富む。集落は島内各地のリアス式湾頭の小さな平野部に点在しているため、かつては孤立的性格をもち、言語や民俗の違いも少なくない。

この南西諸島はおよそ 1000 万年前、アジア大陸と陸続きであった。この時代に、多くの動物たちが大陸から渡ってきた。約 150 万年前になると、現在のトカラ列島あた



りて陸は途絶え、生物の移動もストップした。そして約 100 万年前には活発な地殻変動により、南西諸島はいくつかの大きなブロックに分かれ、沈降と隆起を繰り返した。この変動によって陸続きであった低い部分は海になり、高い部分は島になった。屋久島、奄美大島、徳之島、沖縄、石垣島および西表島が後者にあたる。また、海に沈んだ低い部分はサンゴ礁の発達により、再び隆起サンゴ礁の島になった。喜界島、沖永良部島、与論島がこれにあたる。

このように、奄美大島は大陸と陸続きの状態が長く続いて多くの生物の渡来があったが、分離した後海に沈まなかったため、古代から生き続けている動植物が多く、その海に閉ざされた環境の中で独自の進化を遂げた。それが、この奄美の島で生きた化石と呼ばれる

固有の動物たちだ。この中には、国の特別天然記念物のアマミノクロウサギと、同じく国の特別天然記念物で県鳥でもあるルリカケスがいる。ルリカケスは広い地球上で唯一奄美だけに生息している鳥で、アマミノクロウサギやイボイモリなどと同様、大陸時代の遺存種であり、奄美独自の生態系へ進化適応してきた特産種である。そのほか、アカヒゲ、オーストンオオアカゲラ、ケナガネズミや絶滅寸前のリュウキュウアユなどほとんど奄美でしか見られない野鳥や南西諸島の固有種が多い。また、奄美には日本で第2位の面積を有するマングローブ原生林もある。このように、奄美大島は日本でも珍しい動植物の宝庫であり、しばしば「東洋のガラパゴス」とも称されるゆえんである。

## 奄美生物最後の 聖域、 まんさくぼる 金作原原生林

奄美ではこれまで文献の記録種を含め、約 300 種近くの野鳥が記録されているという。現在日本で記録されている野鳥種約 560 種の半分以上が、この奄美で記録されてきたことになる。これには、渡りの途中で奄美に立ち寄る野

鳥や迷い込んでくる多くの野鳥種も含まれる。それだけに、これらの野鳥たちにとっても、奄美の自然環境や独自の生態系は重要な意味を持っているのである。

ルリカケスは10月～11月頃になると、好物のドングリを地中などに埋めたりして貯食し、冬に備える。これらの種子散布が新たな森づくりや森の再生に役立っている。つまり、イタジイやアマミアラカシなどの広葉樹林の生育にルリカケスが一枚絡んでいるのだ。固有亜種のオオトラツグミやオーストンオオアカゲラは特に原生林に依存して生きている野鳥である。オオトラツグミは推定繁殖個体数が100羽前後で、最も絶滅が心配されている野鳥だ。オーストンオオアカゲラも老木や大径木などのある原生

林なしには生息していくことが難しいとされる。

かつては、奄美の森はどこも、ルリカケスをはじめとする多くの野鳥その他の固有種にとって、安全な住みかを提供する一種の聖域であった。しかし、戦後になって、そうした森の多くは開発によって次々に失われ、唯一手つかずの森として残っているのが金作原原生林<sup>きんさくばる</sup>である。ここは奄美の中でも、天然林が半分近く残っており、イタジイなどは樹齢100年を越すと言われる。かつてWWFの視察に来鳥した英国のエジンバラ公も「スペクタクル」の連発だったという。また、ゴジラ映画のスタッフはこの金作原原生林のポスターを見て、奄美ロケを決定したともいわれている。奄美の森の多くは、戦後、俗に「奄



金作原原生林 ©名瀬市役所紬観光課

振」と呼ばれる開発の波に吞まれて、木が切り倒され、林道が縦横に走り、トンネルが掘られ、山肌が削られ、人の気配が彼らの森の奥深くまで忍び寄ってきたのだった。最

近、こうした奄美の生き物たちと人間のぶつかり合い象徴するかのような事件が起こった。これはゴルフ場の建設をめぐる、開発か自然

保護かで島を二分し前代未聞の訴訟にまで発展した、いわゆる「アマミノクロウサギ訴訟」である。

## アマミノクロウサギ 訴訟

この訴訟は、わが国で初めてアマミノクロウサギ等の野生動物を原告として提起された訴訟として全国に注目された。

この発端はこうである。奄美大島の住用村のゴルフ場予定地を含む市崎地区は古くからアマミノクロウサギが多く生息する地域のひとつとして知られていたが、1992年、ゴルフ場開発によるアマミノクロウサギの生息地への悪影響を懸念した原告は、開発予定地及びその周辺地域で観察活動を行い、アマミノクロウサギの糞などの生息痕を発見した。原告は、アマミノクロウサギをはじめとする奄美の自然を代弁することを目指して、彼らに代わってゴルフ場開発反対の訴訟を起こしたのだ。

この裁判の最大の争点は、自然

環境の保護を目的とするいわゆる「権利能力なき社団」、あるいは自然環境の保護に重大な関心を有する個人（自然人）が自然そのものの代弁者として、現行法の枠組み内において原告として適格と認め得るかどうかにあった。裁判所は1999年、「原告適格」に関するこれまでの立法や判例等の考え方に従い、原告らに原告適格を認めることはできないとの判断を下した。生き物たちの一審敗訴であった。

戦後の奄美大島は一方で港湾、道路、護岸工事などの土木工事が急ピッチで進み、急速に自然が失われていくが、他方では自然保護運動や環境保護運動など、奄美の貴重な森や海を破壊するような大規模な開発計画に対しては真っ向から反対する運動が沸き起こった。1970年代初頭には、宇検村うけんそんの枝手久島えだてくじまの大規模開発問題で推進派と反対派が村や島を二分して対立した。枝手久島の

海岸を埋め立てて大規模な石油備蓄基地を建設するという計画がもちあがり、内外の自然保護団体や環境保護団体とその賛同者たちが何年にもわたる激しい反対運動を展開した結果、計画は中止と

なった。戦後の半世紀、国からの振興開発の大型予算に依存してしか財政が成り立たない奄美群島は、同時に、度々開発か自然保護かで最も激しく対立してきた所でもある。

## 奄美の生物の 紹介者フェリエ 神父

奄美の生物をいち早くヨーロッパに紹介した外国人がいた。カトリック神父ジョゼフ・ベルナル・フェリエ師である。奄美大島におけるカトリック教の布教は1881年(明治14年)、フランスの外国布教団から長崎に派遣された宣教師フェリエ師が1891年(明治24年)12月末、奄美大島伝道の目的を持って名瀬に来島した時に始まった。当時名瀬の人口は6~7千人といわれ、フェリエ師は名瀬を根拠地として、主に大島の北部地方に伝道網を敷いて熱心に布教した。しかし、その後健康を害して1906年に療養のため故国フラン

スに帰国を余儀なくされた。彼が植え付けた信仰の種は後継者の努力によって大正の初期には相当の成果を見るに至った。1918年の調査によれば、奄美大島におけるカトリック教会の信徒数は3,799人、教会堂は9、宣教師はフランス人宣教師2名、日本人伝道師3名であった。

フェリエ師は宣教師としてばかりでなく奄美生物の研究家としても奄美大島を世界的に紹介した第一人者であった。フェリエ師は布教の傍ら、奄美大島特有の昆虫や植物等を採集して故国の学界に送っていたのだ。彼はもっぱら鞘翅類を集め、これをフランスの有名な甲虫蒐集家ルネ・オベルチュールへ送った。フェリエ師の採集品に基づく最初の論文は1894年(明治27年)に出ている。彼が送った甲虫類がフランスの学者の関心を惹き、オベルチュール





サトウキビ畑の農家 ©青山 良氏提供

から激励と相当の報酬を受け、これを伝道と教会建立の資金に充てた。フェリエ師の採集品はすべてオベルチュールの手から専門家の手に分配され、相次いで出版された若干の論文中に記述された。また、その一部は英国の学者の手にも渡り、フェリエ師の採集品として記録されたものもある。フェリエ師はまた植物、特に蘚苔類せんたゐと羊歯類しだにも関心を持ち、これも昆虫と同様にその材料をフランスに送り、後に専門家により研究され、彼の名が冠せられた種類もいくつ

かあるという。

大正11年以來、奄美大島の伝道はフランスの外国布教団の手を離れてカナダのカトリック教派の管轄となり、日系カナダ人宣教師米川基が渡島して布教の傍ら名瀬に大島高等女学校などを経営して島民の教化に努力した。

## 初めて奄美の 自然を撮った男

戦前に、奄美の貴重な生き物たちを写真に撮り、世界にいち早く紹介した一人の日本人写真家がいる。1935年(昭和10年)年4月12日、奄美の住用村すみようそんの城ぐすくに日本初の自然写真家といわれる下村兼史がやってきた。城の山は密林で覆われ、シダが多く、そそりたつへゴの林の彼方からアカヒゲのさえずりが流れ、オーストンオオアカゲラが木を叩いているのが聞こえ、そしてあちこちにアマミノクロウサ

ギの穴や通路があったという。

下村の奄美行き最大の目的は天然記念物のルリカケスを撮ることにあった。アマミノクロウサギとルリカケスを初めて写真におさめた下村は、1935年の秋、ロンドンの大英博物館で開催されたカントリー・ライフ社主催による世界自然写真展にルリカケスの写真を出品し、観客の目を集めた。ルリカケスの写真の隣には「ルリカケスの生息地」として住用村の森林の様相の写真が並んでいた。これこそまさに、ルリカケスと奄美大島の姿が国際的な自然写真展の舞台に登場した最初の作品であった。



トラクターに乗る農家 ©青山 良氏提供

## 毒蛇ハブとの 共生

奄美大島の自然保護に別な形でこれまで一役買ってきたのが毒蛇ハブである。かつて島民は長い間ハブとの戦いに苦勞してきた。昔は年間300人も噛まれ、その半数は死亡したという。ハブに噛まれるとその部分を切ってしまわないと毒が全身にまわる恐れがあったので、とっさに鎌などで患部を切断し、そのため不具になったり、死んだ人も少なくなかった。現在は血清により死亡者はほとんど出なくなった。ハブは近視であるが空気振動に敏感で、獲物の近づく振動を舌と全身の感覚器官でとらえるという。直射日光には弱く、昼間は石垣やソテツの陰に隠れる。獲物が近づくと身体をS字形にかまえ、体長の2倍ほども飛び跳ねて上顎の二本のキバを打ち込む。咬まれた感じは鶏につつかれた程度で、それと気づかずに死んだ人もいるという。また、咬まれると、ひどい場合には1時間で死ぬという。奄美でハブがいるのは大島と徳之島で、喜界、沖永良部、与

論島にはいない。この3島は隆起珊瑚礁の島で、長い間海底に沈んでいたのだから、ハブはいないのだと言われる。

この毒蛇ハブは島民に危害をもたらすやっかいな存在というだけではない。人間はこのハブから様々な恩恵も受けてきた。例えば、大島紬のデザインである。独特の絵柄はハブの表皮の模様を思い起こさせる。奄美大島には人口よりも遙かに多い20万匹のハブが生息すると言われるが、そのハブはどれ一つとして同じ模様のものはいない。それほど多種多様であり、それが大島紬のデザインに影響を及ぼしてきたことは間違いない。ハブとの共生でもたらされたもう一つの恩恵として原生林の保護、あるいは自然保護があげられる。猛毒のハブの存在が人々をして長い間、安易に山中へ分け入ることを遠ざけた。山や森は毒蛇のいる危険で恐ろしいところであり、人間の容易な侵入を妨げた結果、今日まで奄美の貴重な動植物種が壊れずに護られてきたともいえる。

奄美大島は平野が少なくその面積の大半を険しい山岳が占めるというその独特の地形もまた、これらの動物の保護に大きく影響し

てきたといえる。毒蛇ハブの存在とそのほとんどが山岳地帯という地形的特徴、そしてケンムンと呼ばれる森の妖怪や草木虫魚などの自然に対する長く培われてきた深

い民俗信仰。こうしたいくつもの条件が重なって、長い間、奄美の自然が護られ、動植物種の宝庫とされてきたのだろう。

## 道の島

「アマミ」という地名は、古く「古事記」(712年)や「日本書紀」(720年)に「阿麻弥」または「海見」と書かれている。奄美の歴史は、原始から8、9世紀までの部落共同体の時代に始まり、つづいて首長たちが支配割拠していた時代、これに続く琉球王朝時代、奄美の島々が薩摩藩支配下に入った藩政時代の近世、そして明治、大正、昭和(戦前)の時代と、戦後の短いGHQ統治時代および日本復帰以降に大きく分けられる。

江戸時代以降、薩摩藩支配下の奄美は「道の島」と公称された。奄美の島々は、7世紀から8世紀前半まで、遣唐使船の南島通路として、また中国、琉球から日本への渡航の「道の島」として、さらにその船舶の避難場所、薪炭や食料の供給地として海上交通の重要な地点であった。

平安時代にはいると、唐との通交も消極的なり、南島に関する朝廷の関心も薄らいで、824年に、南島一帯は太宰府の管轄外となり、名目上は大隅国に編入されたが、事実は無所属時代に入った。

## 那覇世と大和世

奄美はその歴史において、340年の琉球支配時代「那覇世」と

260年にわたる薩摩支配の時代「大和世」の、2度にわたって長い植民地時代を経験してきた。奄美が琉球に入貢したのは伝説的には1266年以來のこととされるが、実際に奄美に琉球王国の支配が



及んだのは15世紀以降のことである。14世紀の中頃、沖縄本島に、北山、中山、南山という三つの小国家が成立し、1429年に、中山が南山と北山を滅ぼして琉球を統一した。これ以後、奄美には琉球文化が盛んに流入し、世之主よのみしのような琉球王族の血縁者や地元の豪族が島主（大親）に任命されるとともに、また各島には、首里の聞得大君きこえのおおきみからノロが神官として任命・派遣されてきた。そして琉球民謡や舞踊、蛇皮線、琉球焼など各種の琉球文化が奄美の文化に深い影響を与えた。当時、琉球王国は、明が1368年の「海禁政策」によって中国商船の海外通商を禁止したので、東アジアの貿易に大きく空いた穴をふさぐ形で、日本と大陸をつなぐ大きな貿易勢力として発展していた。

奄美は、1609年の薩摩藩の琉球侵攻により武力制圧されると、今度は琉球王国から切り離されて薩摩の直轄地に組み入れられることになった。この時から、琉球弧の呼び方も、薩摩に近い方から口之島、道之島（奄美群島）、琉球、先島と序列化されたものになっていった。薩摩時代の奄美統治は1613年に初めて代官が来てから代官政治

が始まった。薩摩藩は砂糖専売制を行って大阪で砂糖を直営販売して、島民を重税の苦しみに追いやった。薩摩藩は1753年～1755年に、幕府の命を受けて木曾川改修の難工事を行い、大変な借金をした上に、藩主島津重豪の派手な生活によって、財政再建どころかもっと大きな借財を作った。その苦しい藩の財政の建て直しに、新しい植民地である奄美の砂糖が唯一の財源としてその対象にされたのだった。島民は水田をつぶしてサトウキビ畑に転換することを強制され、芋などを主食とする生活を強いられた。奄美はまさに、黒糖生産のための薩摩藩植民地となったのだ。黒糖による納税ができない農民は債務奴隷とも言うべき「家人」に転落し、その数は人口の三分の一にまで及んだと言われる。1871年（明治4年）に家人解放令が出されるが、最終的に解放が完成したのは明治末といわれている。薩摩藩は天文学的ともいわれた藩の負債を、このような奄美農民の過酷な収奪によって精算し、明治維新时期に雄藩として活動する財政基盤を確保したのであった。奄美の黒糖収奪がなければ明治維新は違った形になっていただろうとも

言われる。

このように、琉球王朝と薩摩の狭間で支配・収奪・差別の辛酸をなめた奄美の歴史は、しかし他方で、万葉時代の古語を残していると言われる独特の島言葉、巫女の古い形を残すノロやユタ、数十年前まで見られたさかんな祖先崇拜や洗骨の風習、頭上運搬や額に

ひもをかける背負い籠、高倉や独特の茅葺き屋根、盛大な年中行事や豊かな民俗芸能など、すでに本土では滅んでしまった古代文化の残影を長年にわたって育み続けてきた。奄美が民俗学や文化人類学の宝庫といわれてきたゆえんである。

## 「奄振」と呼ばれる 妖怪

奄美が経験した3度目の植民地支配は、終戦直後の8年間にわたる短いGHQ占領時代「アメリカ世」であった。1946年1月29日、連合軍最高司令部の覚書により奄美群島は沖縄とともに行政分離された。1951年に「奄美大島日本復帰協議会」が結成され、その後の全島あげての復帰運動によって1953年12月25日に日本に復帰した。復帰当時の奄美経済は極度に疲弊し荒廃していたため、政府は復興を重視し、1954年、「奄美群島復興特別措置法」を制定して復興事業を実施

に移した。しかし、郡民と本土との所得格差は一向に縮まらず、それは全国平均の半分にも満たない状況であった。そこで第二期目、三期目と続けて「奄美群島復興特別措置法」と「奄美群島復興開発特別措置法」がそれぞれ制定された。そして、1994年には改正奄振法が成立し、さらに2003年まで10年間の延長が決定された。

このように、1954年6月に奄美群島特別措置法が制定されて以来、「復興」「振興」「振興開発」と改名しながら5年おきに法改正・延長を繰り返してきたが、その基本的考え方は一貫して日本本土や沖縄との「格差是正」と奄美の「経済自立」にあった。そのために、奄美の日本復帰から現在までの45年間、実に1兆4,400億円近い

事業費が注ぎ込まれた。このうち道路、港湾など大規模な自然改変を伴う事業が予算全体の8割近くを占めるといわれる。また、この40年間に、産業の主要な担い手である青壮年層を中心に奄美群島総人口の三分の一が人口流出した。その結果、高齢化が猛烈な勢いで進行し、65歳以上人口は97.4%も増えた。また、1995年の65歳以上

の人口比率は22.9%で、全国平均の14.5%、鹿児島県平均の19.7%よりもはるかに高い。これまでのような、「奄振」にすぎた「格差是正」や「本土並」を追い続けることによって失われるのは、実は奄美の姿そのものであり、地域の自立意識にはかならない、との指摘も多く聞かれるようになった。日本復帰からの半世紀は、奄美の



マンゴー栽培農家 ©青山 良氏提供

人々にとって、まさに「奄振」と呼ばれる妖怪に翻弄され続けた時代であった。今、奄美では、新たな目で足下の豊かな自然と文化に静かに向き合い、奄美の真の豊かさを自らの力で「再発見」する人たちが増えつつあり、またそれを様々な形で情報発信する試みが多くみられるようになってきた。